九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（四）：第二二、二四、二六、三二話和訳

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授

https://doi.org/10.15017/4372032

出版情報：哲學年報. 80, pp.41-95, 2021-03-05. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（四）

―― 第二二、二四、二六、三二話和訳 ――

岡野　潔

今回は『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の第二二、二四、二六、三二話の、四つの章の和訳を行う(1)。第二二と第二四話は「精進」、第二六話は「禅定」、第三二話は「智慧」の波羅蜜をテーマにする。

これら四つの章のうち、まず第二二話『鹿ジャータカ』（Mṛga-jātaka）の章について説明したい。本章は第一一話「鹿ジャータカ」と章名が同じであるが、鹿を主人公とする話の内容は大きく異なっている。アーリヤシューラの詩業に深い敬意を抱くハリバッタは(2)、自分のその二つの『鹿ジャータカ』の創作にあたって、アーリヤシューラ作『ジャータカマーラー』の第二六話『ルル鹿ジャータカ』（Ruru-jātaka）(3)の存在を意識しなかったはずはない。世人によってその『ルル鹿ジャータカ』と比較されることを意識しながら、彼は自身の作品中に第一一話と第二二話の二つの鹿のジャータカを作ったに相違ないが、彼がそのように二つの話を作ったのは、それら三種類のジャータカが決して内容が重なるものではなく、当時の仏教徒たちによって伝承が明確に区別されて相互に別の話と見なされていると判断できたからであろう(4)。競合がそのように避けられていると思われる。

ハリバッタのこの第二二話は厳密に言えば、鹿王の話だけでなく、その章の内容が二つのパートから出来ており、鹿ジャータカはその第一のパートの中身をなしている(5)。そのジャータカは一言で言えば、森にやって来て鹿狩り

をする王の一隊によって鹿の群が囲い込まれて追い詰められた時に、鹿王（菩薩）が示した川渡りにおける自己犠牲的な英雄的な振舞いが王を感動させ、瀕死の鹿王が王に法を説いて、王に狩猟という殺生の行為を反省させるという話である。第二二話の『鹿ジャータカ』とアーリヤシューラの『ルル鹿ジャータカ』は、話の組立の細部を見れば違っている点も多いが、しかし話の土台的な部分で（鹿狩りの場で人王と鹿王が対話を行う設定、法話による話の終結のさせ方など）両話は近似しており、両伝承の形成過程における親縁性が推測される。両話から感じられる親近性は、もともと両話が「鹿狩りのジャータカ」という共通した古い話から出発して、本来は単純な話の土台・話型の中に別々のモチーフを組み込むことによって分離独立した話であることを示唆しているように思われる。

その両話について、話を構成するモチーフの重要な相違を見てみると、『ルル鹿ジャータカ』では、川に溺れているのを助けた男が裏切って鹿王の居場所を王に教えるという「人間の忘恩」のモチーフが、また王妃が美しい鹿王を夢に見て入手を切望するという「王妃の欲望」のモチーフが入っていることが、その話に固有性、つまり第二二話との別異性を与えているのであるが、動物ジャータカではこれら二つのモチーフは珍しいものではない。他方、第二二話の『鹿ジャータカ』では、鹿王が川で他の鹿たちが跳び降りる踏み台になって他の鹿たちを対岸に渡して死ぬという、「踏み台」のモチーフが入っていることが、この話に固有性を与えている。ただその「主人公が他の者たちの脱出の踏み台になる」というモチーフも、この川渡りの鹿の話だけに見られるものではなく、他の猿たちを逃がすために猿王が我が身を踏み台にして樹と樹の間を橋渡ししたという、有名な『猿ジャータカ』の「橋渡し」のモチーフと本質的に同じである。それ故、学者によっては、古い猿ジャータカのモチーフを鹿に応用したことが、第二二話の『鹿ジャータカ』が固有の話として成立する契機になったのではないかという見方をすることも可能であろう。

この第二二話は内容的に区分すれば、第一パート（鹿の前生話）が第四九詩節までであり、続く第五〇詩節から七

六詩節までは第二パートとして区分しうる。この第二のパートは、カーシャパという過去仏の臨終時における或るアショーカ樹に棲む精霊（樹神）の誓願の話である(6)。その第二パートの全く異なる話が、第一パートの鹿の話とどう関係するのかといえば、どちらの話も、釈尊の最後の弟子として釈尊の臨終の際に阿羅漢になったスバドラという遍歴行者の前生話として、大般涅槃が間近に迫った釈尊によって説かれた話とされている。これら第一と第二のスバドラ前生話は、『根本説一切有部毘奈耶雑事』の大般涅槃経関連の記事（漢訳では巻三十八）において、複数のスバドラの前生話が挙げられる中で一緒に出てくるものであり、作者ハリバッタは恐らくその『雑事』の記事か、あるいはその記事に類似する梵文『アヴァダーナシャタカ』第四〇話などの根本有部系の説話伝承のソースから、これら二つの前生話を取ったものと思われる。

この第二二話では、第一パートの鹿の本生話が終わった時、釈尊自身の言葉として、鹿王（釈尊の前世）によって他の鹿たちの最後に助けられた一匹の鹿の子が、今世で釈尊に最後に救済された弟子であるスバドラの前生であったことが明らかにされる（第四九詩節）。しかしスバドラは前世で鹿の子として最後に菩薩に助けられた者であった、という因縁だけでは今世との業の繋がりとして少し弱すぎると仏弟子たちは感じたらしく、その場に居た仏弟子たちは釈尊にスバドラの前世について更に質問し、「スバドラがすべての弟子たちより後に阿羅漢を得て、しかも世尊よりも前に般涅槃するとは、どんな業を作ったのか」と尋ねた。その問いへの答えとして釈尊が語ったのが第二パートをなす別のスバドラの前生話である。過去世にカーシャパ仏の大般涅槃が迫った時に、アショーカ樹の樹神が、その仏の甥である比丘アショーカを伴って神通力により空を飛び、仏の臨終に間に合わないと思われたその比丘をたちまち仏の枕元に連れていったので、その比丘は仏のもとで最後の阿羅漢になることが出来た。その善行をなした樹神がその時カーシャパ仏の涅槃の直後に誓願をなし、その誓願によって、今世にスバドラが釈尊の最後の弟子となって阿羅漢果を得て、仏より先に般涅槃するを得たというのが、その第二パートが語る因縁譚である。

さて次に、今回訳した第二四話『ムーリカ・ジャータカ』について若干解説すると(7)、ムーリカという主人公（菩薩）の名は、「［薬草の］根の採取者」という意味である。主人公は山から薬草を採ってきては薬を作り、病に苦しむ人々に与えるという仕事をしている。医者のような治療活動も行っているが、主人公の医療活動の中心は「薬師」としての仕事のようなので、私はこの章の和訳のタイトルに「薬師」を付け加えて、『薬師ムーリカ・ジャータカ』とした。この第二四話は章として短く、三二詩節から成る。主人公が病気の独覚（辟支仏、縁覚）を山の中で見つけて、憐れんで治療したことがこの話で語られている。懸命に利他行としての医療活動に励んだ菩薩の努力、とくに炎暑の季節に不便な山の奥で独覚の看病をなす際に十分発揮された菩薩の精進波羅蜜を語ることがこの章の目的である。この章は最後に、看病・介護という活動の重要性を訴えて終わる。「さあ、このように、かの世尊（釈尊）は菩薩であられた時に、［……］自らの強い疲労を気にかけることなく、病に衰弱した独覚の介護を行ったのです。それ故、善業の果を願う良家の子は、病に衰弱した者たちの看病に無関心であってはなりません。」章の最後を締め括る作者のこの言葉に、周知度が極めて低いこのジャータカを特に選んで作品に仕立てた彼の思いを感じることが出来る。長期にわたる看病は看護人に極限までの忍耐を要求する。疫病の可能性がある場合は、家族であっても看護がどうしても疎かになる。まして独覚のような所属のない立場の者は、無看病となろう。看護という仕事は地味で目立たないが、最も菩薩的な慈悲と精進が必要な、英雄的な行為なのである。

次に、ハリバッタの第二六話『ジャージュバリン仙人ジャータカ』について少し説明する(8)。この一つのエピソードに似た、短いが感動的な話は、仏典の『僧伽羅刹所集経』や『大智度論』に載っている話であるが、もともと仏教起源の話ではないらしく、ハーン博士が指摘するようにヒンドゥー教の大叙事詩『マハーバーラタ』の中に最も重要な並行話が見つかる。主人公（菩薩）は婆羅門である。鳥を不安がらせないように頭の螺髪の上に鳥の巣を載せたままで、慈しみをもって鳥の雛たちが孵って巣立つまで、瞑想の座から立つことをせず、不動のままで禅定

を続ける婆羅門仙人のやさしい姿が描かれる。はたから見れば少し滑稽で、俗人の笑いを誘うかもしれない仙人の姿、森の自然の中で生き物たちに慈愛を注ぎつつ、彼らと一体になって生きる聖者の気高い姿は、動物と語らうアシジの聖フランシスコを思わせる。この話が描く「古代インドの理想の修行者像」が、生類への憐れみと智慧とをあわせもつ「菩薩の理想像」とよく重なるため、有部の仏教僧はこの婆羅門仙人の話を本生話として採用したのであろう。中央アジアのキジル遺跡にはこのハリバッタ第二六話のジャータカの内容にあたる壁画が、少なくとも六つ見つかっていることを干潟龍祥が指摘した(9)。中国・日本ではほとんど無視されてきた話であるが、ハリバッタの作品の影響か、中央アジアを含むインドの北伝仏教圏ではかなり愛好された話であることがわかる。

次にハリバッタの第三二話『ライオン・ジャータカ』を説明すると(10)、この章は全部で百一詩節から成り、全三四章の『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の中で二番目に長い章である。この詩節の多さが、作者ハリバッタがこの章を製作するにあたって抱いていたであろう意欲の強さを示しているように思われる。この長い章を作った強い創作意欲は作者自身のハリバッタ（Haribhaṭta ライオン博士）という名と無関係ではないかも知れない(11)。ハリバッタがこの章の創作にあたって直接基づいた源泉資料は不明であるが、現存する数少ないパラレル文献から判断する限り、元となる伝承はかなり短い話ではなかったかと思われる。展開が単純そうな話をよくもここまで長く見事に脚色したものと、ハリバッタの詩人としての力量に感心せざるを得ない。動物の捨身譚というものは、主人公（菩薩）が鹿や鳥や猿のように弱い立場の生き物であったほうが、逆に勇気が際立つため、語りやすいのであり、ライオンという自然界最強の獣王が主人公である場合、その話が王族以外の聴衆の共感を得るにはよほど注意して話の細部を仕上げる必要がある。ハリバッタは章の制作にあたって、わざとユーモア性を強めにしたようだ。獣王が自ら小猿たちを子守するという原話の設定を生かし、ユーモアの度合いを他の章よりも強めたこの章は恐らく聴衆の人気を得たはずであり、全部の章の中でもこの章は最も人気があった章であると私は思う。中央アジアの仏教遺跡

で、このライオン・ジャータカの内容にあたる壁画がキジルとクムトラで少なくとも七回は描かれている事実に干潟龍祥は注意する[12]。それはその地でライオン・ジャータカの話が愛好されていたことを示すものである。また中央アジアでこの第三二話はウイグル語訳＝梵語の両語併記の写本断片と梵文の写本断片が見つかっている[13]。パラレル文献の少ない、古くはインドでもあまり知られていなかった菩薩捨身譚のように思える、このライオン・ジャータカが、六世紀以降には遠く中央アジアの僧院にまで及ぶ人気を博していたとすれば、それは恐らくハリバッタが文学的に生き生きと表現したこのライオンの章が広く当時の仏教徒たちの間に呼び起こした感動の直接あるいは間接的な影響であるように思われる。

★

亡きミヒャエル・ハーン（Michael Hahn）博士を追憶しながら、博士が生前に発表した『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の校訂テクストをすべて読んで、翻訳を試みることが、私が本論文の連載を開始した時の目的であった。そして今回の（四）の論文をもって、当初に立てたその目的は一応果たされた。博士が生前に発表した梵文テクストの全部の章がこれで和訳されたことになる。

ハーン博士は梵文写本として現存しているすべての章を全部校訂し終えることが出来ず、その死によって校訂が未完成のまま中断された章が十ほど残っていた。博士の弟子の一人である（私にとっては最も畏敬する兄弟弟子にあたる）ドイツのシュトラウベ（Martin Straube）博士は、ハーン博士の遺した種々の研究データの委託を受けて研究を継承し、遂に現存梵文の全章の校訂を完成させた。それが昨年の夏に博士がインドから出版した『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の新しいテクスト（Straube 本）である。

このStraube本の出版により、ハリバッタの残りの現存する章の校訂された梵文を読むことが出来るようになった。ハーン博士の積年の願いの実現に他ならないこの出版本の登場は、この四年間続けてきた和訳の連載を来年度

以降も続けることを私に決心させた。私は今後、このStraube本によって初めて公表された諸章を、写本の欠損が比較的少ない章から順次和訳してゆく予定である。

第二二話　鹿ジャータカ（Ⅱ）

『勇猛なる精進』（vīrya）がなければ、生き物たちの幸せのために願った成果は、わずかなものであっても実現しません。そう考えて、大きな恵みをもつ者（菩薩）たちは、［自らの］疲労困憊を考慮に入れずに、努力し続けています。〔二二・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　［その地の］或る場所では［河が］浄らかな水を流し、蘆の連なりが岸辺に沿って暗緑色の線条となって伸びており、マドグ水鳥の群に追われてぴちぴち震える魚たちの群で水面がいっぱいに立ち騒ぎ、また広げられたドゥクーラ布のような真っ白な砂州があって、その河は山の脇腹に抱きついて流れています。また或る場所では、森林火災によって半分焼けた熟したユカン（庵摩勒）やミロバランやナツメの実などが地面に散らばり、エメラルドの針［のように輝く］緑色のダルバ草の若枝が［地を］厚く覆っています。また或る場所では、猪が［水辺に］降りて来たので浮かんでいたカエルたちが恐れていっせいに逃げ出す池の端があり、また或る場所では、鹿の肉で［腹を］膨らませて眠っている一匹の虎がうずくまる洞穴の口があり、種々様々な蔓がまるで腕輪のように巻き付いたため深く食い込んだ屈曲した線が刻印された樹々の幹があり、また、びっしりと密生した葉をもつ竹林が高く伸び育って真っ暗である繁みがあります。［それらの眺めをもつ］稠林の中で、菩薩（釈尊の前生）は鹿の一群を統べる［鹿］王としておりました。その偉大な心の方（菩薩）によって、鹿の群は何も恐れることなく、まるで一つの王国が正しい行状をもつ一人の人王によって守られた時のように、大きく繁栄するにい

たりました。

(a)シヴァの頸部のように背中が青黒く、(b)緑の草を噛みながらも、(c)ライオンのような勇気ある性質をもつ、(d)善と不善の道をよく知っている、その鹿王に、かれら鹿たちはよく従いました ― まるで従順な弟子たちが師（親教師）に従うように。〔二二・二〕

◇ さて或る時、狩猟を愛好する一人の王が、猟師たちからその鹿の群のことを耳にしました。その王は弓をつかんで、上等な馬に乗ると、軍を従えてその森にやって来て、遠くからその鹿の群を眺めました。

黒斑のかの鹿（菩薩）は、反芻をやめて頭を上げ、じっと動かずに、軍隊を率いる王を観察しました。[今や]その王は矢に射られるのを恐れる鹿たちを矢の射程圏内に導き入れていました。〔二二・三〕

(a)くつわの音を響かせ、(b)弦を張った弓を握り、(c)殺戮に気がはやる、その軍を観察して、恐怖のあまり目を落ちつきなく動かしている鹿たちに囲まれたその鹿の群の守護者（菩薩）は、決然として次の様に考えました。〔二二・四〕

「もし［国の］危難が何ら生じていない状況なら、善行（福祉）に専念することで、王が幸せを求めている民を守ることは、たやすいことだ。しかし［侵略という］禍の中にあっても、自身の艱難辛苦は考えずに［民を］守ってやるのが、守護者たる王というものだ。〔二二・五〕

これら、恐怖のあまり動揺し視線の定まらぬ目を動かしている鹿たちが、矢に打たれながら、流す血で大地を濡らし、身を震わせながら［次々に］目の前で倒れてゆくのを、私はどうしてただ眺めていることが出来ようか。〔二二・六〕

それゆえ、狩を愉しむ者たちが鋭い矢でこれらの鹿たちを射殺さないうちに、軍のために恐怖に目をあてどなく動かしている彼らを守るため、私は懸命の努力をしなければならぬ。〔二二・七〕

◇　この森はあの軍によってもう完全に周りを取り囲まれている。するとどの方角に鹿の群を導いて逃がせばよいのか」と、周囲を眺めながら、彼は考えました。「よしこれだ。手立てを思いついた。この山の河流を跳び越えてゆけば、鹿たちは無事に助かると判断できる。しかし、これらの鹿たちは一回の跳躍ではこの激しい水流である川を跳び越えることが出来ないはずだ。だからこの場合、こうすればうまくゆく―この河流の真ん中に立ったままでいる私の背中を足場として踏ませれば、これらの鹿たちは容易に［向こう岸へ］行くことができる。」

このように考えを巡らせると、かの偉大な心の方（鹿王）は、(a)或る場所で岸辺の樹木の枝先に水がぶつかり［流れが妨げられている］、(b)うず巻く渦の中央で、くるくる回る泡のかたまりがはじけ散っている、その山の河流の中ほどに入って、［流されないように］自ら踏みこたえながら、かの鹿たちに呼びかけました。

「わが群の者たちよ、恐怖することなく、その岸辺から跳躍して、私の背中を足場として踏み、この危険な場からただちに逃げなさい。〔二二・八〕

私のこの肉体というものは、壊れやすさの故に、ダルマ（永遠に存続する法）では無い故に、価値がないものだ。あなたたちを無事に渡すことによって、この［肉体］は遂に本質的で堅固なものを獲得することが出来るだろう[14]。〔二二・九〕

もし利他に役立つことが無ければ、この肉体は穢れた悪しきものにすぎない。しかし、他者を益することに資するなら、これは［かけがえのない］『肉体という宝』となる。〔二二・一〇〕

王の兵たちに追い詰められたあなたたちを、もしこの危難から守ることが出来たならば、今この大地において私が「鹿の群の王」と呼ばれたことは、それだけで無駄ではなかったことになろう。〔二二・一一〕

だから、さあ今、あなたたちの上に鋭い矢が落ちてこないうちに、山の河水を渡るための架け橋となる私の背中に跳び乗って、あの軍隊の恐怖から逃げ出しなさい。」〔二二・一二〕

◇　その時死の恐怖に怯えたそれらの鹿たちは、群の王の背中を足場にして、川の水を跳び越えてゆき、向こう岸へと到達し始めました。

恐怖に定まらぬ視線を動かしている鹿たちが、猛烈な勢いで彼の背中に跳びおり続ける間、その鹿の群の守護者（菩薩）は［水中で］ひづめの腱を激しく引き締めていました。〔二二・一三〕

その時、［鹿たちの］ひづめ［の打撃］によって引き裂け、肉がえぐれたかの鹿王の背中から、血が迸り出ましたが、彼はその傷を気に留めることなく、鹿の群が山に逃げ去って行くのを遠く眺めて、歓びを得ました。〔二二・一四〕

［救う］方策や力によって生き物たちを守り抜く偉大な者たちにおいては、内面にある歓喜の流れが、苦痛［の感受］を抑えるものなのです。〔二二・一五〕

◇　さてその時、鹿たちを渡すために河水の中央で自身を踏み台にした群の王（菩薩）をつぶさに見て、驚愕するに至ったかの王は、弓に矢をつがえている兵たちに命令を下しました。「誰かもし鹿を［一匹でも］射殺すなら、私に逆らう者となる」と。

その王の命令を聞くと、その兵たちはただちに矢を弓の弦から外しました。〔二二・一六〕

◇　さて菩薩（鹿王）はすべての鹿が渡り終えただろうかと思って、後ろを眺めやった時、(a)ひどい恐怖のあまり目を落ちつきなく動かし、(b)すでに渡り終えた群をみつめながら、(c)非力さの故に思い切って踏み出すことが出来ず、(d)どちらの方角にゆくべきか心で躊躇い続けている、一匹の幼い鹿の子［が残っているの］を見ました。［その子を］眺めて、かの［鹿王］は強い憐れみを抱きました。

［「もう］恐れることはありませんよ。独り［残されている］子のあなたを、菩薩は決して見放したりしません。」――まるでそう、花咲く樹々は、蜜蜂たちの羽音［という言葉］をもって、その子を安心させようとする

かのようでした。〔二二・一七〕

◇ その時、群の王はその河水から出て上がってくると、鹿の子に言いました。

「さあ、私の背中の上に乗り、死の不安を捨て去りなさい。私がお前をこの岸辺から川の向こう岸へ連れていってあげよう。〔二二・一八〕

輪廻的生存の海より、生き物たちを渡さんと［久しく］『勇猛な精進』に努めてきたこの私が、どうしてお前ひとり、この一河水を渡さないでしまうようなことがあろうか。」〔二二・一九〕

その時憐愍の心を堅く持つ、かの『勇猛な精進』をもつ者（菩薩）は、背中に子鹿を載せたまま、白波を花鬘のようにつけている河水に跳び込みました。〔二二・二〇〕

その河はまるで、「あなた様の背中にあるこれらの傷がどうか激しい痛みを生じさせませんように」と語りながら、波という沢山の手で、渡りゆく彼を撫でさするかのようでした。〔二二・二一〕

◇ 群の王はその鹿の子を［無事に］その河を渡らせ終わると、歓喜に目を大きく見開いている母鹿のもとに帰してやりました。

のどが渇いていた子鹿は、地面に膝をつき、乳が溢れ出るその［母の］乳首に急いでむしゃぶりつきました。〔二二・二二〕

その［母］は首を回して、乳を飲むために口を動かすその幼子を、舌の先を転がしながら愛情ぶかく幾度もなめてあげました。〔二二・二三〕

◇ その時菩薩は極度の疲労と［背中の］ひづめによる傷の痛みのため、懸命に持ちこたえていた体力が遂に尽き果てました。

ひづめの足跡のある草地、鹿たちの去った道を、混乱した意識でなんとか探そうとしながら、血を滴らせてい

る彼は深い疲労に包まれて、ゆっくりと地面に坐り、しばしの間休息しました。〔二二・二四〕

「いとしいわが子よ、［お前の］母でありながら、今日私は残酷にも、お前をこんな［瀕死の］状態になるまで、導いてしまったのです」と、―あたかもそう、『憐れみの心』［という見えざる聖母］が、傷ついた体のかの［菩薩］を見つめながら、後悔から激しく泣いているかのようでした。〔二二・二五〕

◇　さてかの王はその河水を渡り、従者たちに囲まれながら馬から下りると、驚愕した心を抱いて、その偉大な心の方（菩薩）に恭しく近づきました。かの群の王は王をみつめて、語りました。

「立って出迎えるべき、あなた［がいらしたの］を見ても、私が立っておりませんのは、それはわが無作法によるものではなく、深い疲労によって私が消耗しきっているためなのです。」〔二二・二六〕

◇　かの王は驚きながら［彼の］傍に坐って、体を気づかう［挨拶の］問いの言葉を述べ、讃歎しながら次のように群の王に語りました。

「(a)恥を知らず、(b)他［の生き物］を害そうと武器を振り上げ、(c)『快楽への欲求』という白内障により『理性』の視力が損なわれている、私どものような『人という獣』は、(a)法を知り、(b)憐愍をそなえた、(c)『鹿の聖者（牟尼）』たる、あなた様を敬うべきなのです。〔二二・二七〕

王とは［概して］わが身を守らせようとして、戦闘の時に恐れを見せない家来たちを養っているわけですが、あなた様の指揮は、［ご自身の身よりも］自らの群を守ることに巧みであることにより、完全に［人間の］王たちの指揮を凌ぎました。〔二二・二八〕

戦闘の最中に多数の家来たちが王を守ったのであれば、そこに何ら不思議はありませんが、しかしあなた様という鹿が、実にたった独りで、あれらの沢山の［鹿たち］を守ったということはなんとも驚きです。〔二二・二九〕

鹿王よ、あなた様のこの、多くの徳性と憐愍をそなえもった『鹿たること』は、私のこの、(a)徳性が欠け、(b)

憐愍の欠如のために卑しい、『人たること』を、明瞭な差をもって、笑って貶むかのようです。」〔二二・三〇〕

◇　このように高く称えてから、かの王は群の王に尋ねました。「しかし一体、他者を助けることに懸命であるこの『勇猛なる精進』によって、あなた様はいかなる地位を願っていらっしゃるのでしょうか。」―　菩薩は答えました。「大王よ、お聞き下さい。

勇猛なる者たちの最高者たる王よ。私の『勇猛なる精進』は、仏の位に達しようとするものです。その［懸命な努力］はたとえ鹿の身であろうとも、力の限りなされて、衰えることはありません。〔二二・三二〕

恐怖に混乱するあれらの鹿たちを、恐ろしい勢いで流れる河水から越えさせることが出来たように、私は同じ様に、多くの煩悩によって悩乱する生き物たちを、輪廻的生存の苦しみの海から越えさせてあげたいのです。〔二二・三三〕

◇　また大王よ、『勇猛なる精進』を嫌がるなら、どんなに力量をもつ者であっても、希望する地位に達することは出来ません。［次の喩えを］ご考慮ください。

もし人が怠惰であるなら、［援助してくれる］仲間がいたとしても、地位の上昇はありえません。［毬自体が］水にふやけているなら、手の先で地面に毬をついたとしても、決して上に揚がることがないようなものです。〔二二・三三〕

◇　また、

賢人であっても、もし怠惰な考えをもっているなら、幸せを適える場所である高い地位に達することは出来ません。一艘の船が、艪をこぐ者たちが［懸命に］推進させない限り、長くかかっても海の対岸に着けないようなものです。」〔二二・三四〕

◇　王は言いました。「鹿の群の王は正しくお語りになりました。なぜなら、

たとえ世に知られた富と繁栄をもつ、名誉ある清らかな家柄に生まれていようと、またその賢さによって、幾つもの集りの場で学者としての最高の位置を得ていようとも、怠惰さがもしあったなら、その人の願いが実現に達することは、一度たりともありません。矢を弦につがえようとも、射手が［当てようと］努力しなければ、的に達する矢が決して無い［ように］。〔二二・三五〕

◇ それ故これほど『勇猛な精進』に専心しておられるあなた様は、［きっと］仏の位に達することが出来るでありましょう。

あなた様よりも前から、この世界において、(a)寂静の［仏の］境地に登ろうと願い、(b)煩悩に乱されない心をもち、(c)誓願をなし終えている、優れた人々が、悟りに向かって励んでいます。しかし彼らが疲労困憊して道をゆっくり走る馬たちのように走っている中を、疲れ果てることの恐れを捨て去っている、駿馬の如きあなた様は、［特別なその御努力によって］先頭者になるでありましょう。〔二二・三六〕

(a)暗翳のない身体の光の塊を暈輪（聖なる後光）としてそなえもち、(b)法話を願う人々に繰り返し法を説き聞かせ、(c)『徳性』という財をもつ賢者たちから敬われている、(d)煩悩の束縛を断ち、(e)輪廻的生存を離れ、(f)仏位に到達した、［未来の］あなた様を、幸に恵まれた人々は見るでありましょう。」〔二二・三七〕

◇ このようにかの王は菩薩をほめ称える言葉を述べてから、［更に］語りました。

「ああ、かくも法に向かって［求道して］おられるあなた様を見て、私にも法を欲する思いが生まれました。そこで、偉大な智者よ、法を知る者たちの最高者よ、どうか法をお説きください。浄らかなその法を遵守することで、私が［死後］悪い世界（悪趣）に赴くことの無いように。」〔二二・三八〕

◇ 菩薩は言いました。「そう願われるのでしたら、では大王よ、お聞きなさい。

非難されるべき行いをやめ、善行に依って行いをしなさい。――これが智者として知られた人々が正しくお説き

になる、『教え（法）の真実義』なのです。〔二二・三九〕
その真実義が明白なものにされ、善行と悪行［の違い］が明らかにされているのにもかかわらず、それでも不正の道を歩む者は、眼があっても［心の］盲人です。〔二二・四〇〕
それ故、智慧という灯明によって［照らされた］偉大な道を見た［あなた］は、煩悩を滅することに資する［善き］行為を尊んで下さい。〔二二・四一〕
無知を滅した方、大地の支配者よ、法に従ってこの大地をお守りください。人々はつねに王たちを、苛酷な刑罰のゆえに恐れています。〔二二・四二〕
世に輝きわたり、蓮根の割った断面のように白浄である名声について、何かあなたが願いをお持ちでしたら、或いはまた、期待した成果を獲得する願望をお持ちでしたら、どうか清らかな『徳性』という飾りをおつけになってください。」〔二二・四三〕

◇　その時かの王は、「ああ、あなた様のこの法の御教示は、私のこの心を爽やかに愉悦させて下さいました」と述べて、甚だ歓喜するに至りました。
その後、［背中の］ひずめの傷から起こった激しい苦痛に満たされて、かの群の王は瞑目しました。〔二二・四四〕
福徳ある生をもち、目標達成の満足を得た、その［鹿王の］ため、王は栴檀の木材をもって薪の山を積み、火葬の儀式を行いました。〔二二・四五〕
憐れみの心と浄らかな本性をもつかの鹿が、心友のごとく［惜しまれて］天界に去った時、王はいつまでも悔やみ悲しみながら、気落ちした心を抱いて、速やかに都城に戻りました。〔二二・四六〕
生命ある者たちを助けることを能くした、かの鹿が亡くなった時に、雌鹿によく似た［やさしい］眼をもつ、善行をそなえた森の精霊たちは、まるで同族の親しい者が死亡したかのように、活動をやめて［喪に服し］、と

めどもなく涙を流しました。〔二二・四七〕

その時、山々の峰の震動を伴って大地が揺れ動きました。吹く風により大きく盛り上げられた海の波がありました。飛び回る蜜蜂でいっぱいの、芳香をふりまく多量のマンダーラ（天界の樹）の花々が空から落ちてきました。〔二二・四八〕

◇ ―世尊（釈尊）は涅槃されるに臨んで、比丘たちの前で、［以上の］このジャータカをお語りになられました。「その時その森において鹿の群の王であったのは私です。そして［その時の］鹿の子が、この遍歴行者スバドラだったのです。」〔二二・四九〕

◇ 世尊が般涅槃される前に、其処で比丘たちが遍歴行者スバドラについて質問しました。「しかしながらスバドラは一体いかなる業（カルマ）を作ったのでしょうか、あらゆる弟子たちの後に阿羅漢を得て、しかも世尊よりも前に般涅槃するとは。」― 世尊はお答えになりました。

「所知（知識）の大海の彼岸に達せられた方である、カーシャパ（迦葉）という名の仏が［過去世に］出られましたが、その聖者の甥に、アショーカという比丘がいました。〔二二・五〇〕

アショーカは「善逝（仏）は母方の伯父であるから、その私に至高の光明（悟り）は容易に得られるだろう」と考えて、解脱のために努力しませんでした。〔二二・五一〕

ある時、アショーカが他国に行っている間に、賢者たちの最高者にして再生無き者、カーシャパは涅槃［に入ること］を思い定めました。〔二二・五二〕

その後、比丘アショーカが或るアショーカ樹の下に休んでいると、その樹に宿っているひとりの精霊（デーヴァター）が、悲しみにとらわれた心で真珠のような輝きの一滴の涙を零しました。〔二二・五三〕

「み仏の涅槃（入滅）が今日、あるであろう」―そう思いめぐらせて悲しんでいるその森の精霊の熱い涙が、そ

の托鉢比丘の体の上に滴り落ちました。〔二二・五四〕

「この空には雲一つないのに、どうして私の体にこの水滴が落ちてきたのだろう。」―そう呟いて上を見上げた彼は、その精霊が泣いているのを見ました。〔二二・五五〕

「精霊よ、どうしてあなたは愁いを生じて、泣いているのですか」と、その、ひどく気落ちして哀れなさまの彼女に尋ねると、その［樹霊］は言葉を詰まらせながら、なんとかその比丘に話しました。〔二二・五六〕

「憐れみ深く、煩悩という燃料を焼き尽くした方、自在者であられる偉大な牟尼、カーシャパが、生類に利他を施すことをやめて、人々に愁いを与えながら、今や涅槃に入ろうとしていらっしゃいます。ですから哀れな私は泣いているのです。〔二二・五七〕

(a) 異教の論者たちの言葉という蛾たちに［焔が］揺らされることのない、(b) 正道と悪道とを普く照らしている、灯明たる牟尼が、般涅槃に入られたら、きっと三界の生類の上を遍く覆う黒闇が現れることでしょう。〔二二・五八〕

その、森の精霊の言葉を聞いたとたん、まるで鋭い矢で急所を射られたかのように、彼は瞑目して地面に倒れました。そしてしばらく経って身を起こすと、号泣しました。〔二二・五九〕

森の精霊は心配して彼に尋ねました。「比丘よ、お語りください、どうしてそのように激しく泣かれていらっしゃるのですか。」―「かの世尊は、私の母方の伯父なのです。どうして煩悶せずにいられましょうか。」―そして彼は次のように語りました。〔二二・六〇〕

「私は怠けており、『仏』という樹から、その甘美な『言葉』という花をごくわずかしか摘まなかったのです。三界における煩悩の相続を滅ぼす果（悟り）を、愚かであった私は得ないでしまいました。〔二二・六一〕

［ああ愚かな私よ］、どうしてお前は、わが心意（マナス）の場に未だ留まり続けている、解脱への道を妨げるこ

の恐ろしい闇（タマス）を、『如来』という月からの『言葉』という光線により打ち破って、涅槃に達しなかったのか。」〔二二・六二〕

◇　するとかの精霊はその比丘に次の様に語りました。「どうかそんなにひどく落胆しないで下さい。かの世尊がまだ涅槃（入滅）に至らないうちに、私が真言（マントラ、密呪）の力によって、虚空を通ってあなたを［彼のもとに］お連れしましょう。」―「あなたのご親切に感謝いたします。」―　そう、かの如来の甥が答えると、その精霊はそのアショーカの樹から、真言の誦唱がなされた花々を取り、「この両掌一杯のアショーカの花をじっと見つめながら、空を飛ぶ私の後についていらっしゃい」と言いました。

彼は両掌一杯のアショーカの花々から視線を動かさずに、空を通って［飛びゆく］精霊の後についてゆきました。そしてたちまち如来のもとにたどり着くと、涙を幾たびもはらはらと滴らせながら、［仏に］語りかけました。〔二二・六三〕

「放逸で、幼稚なこの私が、『理知』という舟をもたずに『無知』の大海の中に沈んで、『苦』の大波に襲われ苦しんでいますのに、［あなた様は］どうしてただちに［彼岸に］渡すことなく、去ろうとなされるのです。」〔二二・六四〕

そう、言葉を詰まらせながら語り、溢れ出る涙に目を霞ませているその彼を解脱させるため、ジナ（仏）はただちに邪道から彼を引き戻し、浄らかな道に導きました。〔二二・六五〕

◇　その時に正等覚者カーシャパは、その甥を阿羅漢果にあずかる［聖者］にし、また［その場の］あらゆる生類を『言葉』という光で照らした後、般涅槃しました。

かの世尊が般涅槃なされると、悲しみに支配された神々・アスラ（阿修羅）・キンナラ（緊那羅）・マホーラガ（大蛇）・ヤクシャ（夜叉）・人間たちの上に、空からマンダーラ（天界の樹）の花々が雨のように降り注ぎましたが、そ

の時、かの精霊は悲しみのあまり、様々な嘆きの言葉を次の様に語り始めました。

「(a)獅子座にお坐りになり、(b)花のような［芳しい］言葉をお発しになる［あなた様以外の］いかなるお方から、法を求めるこれらの生類は法の説示を聞けるでしょうか。〔二二・六六〕

ああ庇護主よ、光明たるお方よ、太陽が没するようにあなた様が彼岸に行かれてから、この生ある者たちの世界は、抑えきれない闇（タマス）［の到来］によってうす暗くなっています。〔二二・六七〕

今日、あなた様が寂滅（涅槃）に入られてから、鎮まることのない愛の神（カーマ）は、生類を再び迷妄に陥らせるために、今また再び、弓をかざしています。〔二二・六八〕

『牟尼が寂滅され、私たちは依処を失ってしまいました。高まった悲しみの激情を抱いたまま、私たちは何に頼ったらよいのでしょうか』と、―あたかも［聖者の内なる］『徳性』たちは、学びの道（所知道）に同行してきたあなた様を失って、そう、叫んでいるかのようです、至高の牟尼よ。〔二二・六九〕

また、『悟りへの誓願を堅持して、生き物たちのために三界を巡り［輪廻し］ながら、［利他の］思いを堅固に変えることがなかったあなたを、わたくしが見捨てることはありませんでした。それなのに、愛しいわが子よ、なぜあなたは母であるわたくしをこのように捨てて、［涅槃に］去ってしまったのです』と、―あたかもそう［言いながら］、あなた様が去られた今、『憐れみの心』［という聖なる尊格］が痛ましく落胆して、泣き嘆いているかのようです。」〔二三・七〇〕

◇　その時その比丘は語りました。「さあ精霊よ、もう［そのように］悲しみ嘆くのはよしなさい。かかる『無常性』が侵さない場所はどこにもありません。かくの如き世尊ですら、金剛（ダイヤモンド）のように堅重なる、『本質的な堅固さ』をお持ちではないのです。」

するとその時、かの精霊はなんとか自身の心を励ますと、次の誓願をしました。

「この比丘が私のもとに来て、［阿羅漢］果を達成することが出来たように、同じ様に、私はシャーキャ・ムニ（釈迦牟尼、釈尊）の最後の弟子に、その時なれますように。〔二二・七一〕

かの牟尼（釈尊）の涅槃の時にあたって、［私は］阿羅漢果を達成し、そして［仏の涅槃を］悲しむことに堪えられない私は、かの［み仏］より前に般涅槃できますように」――と。〔二二・七二〕

◇

世尊は以上のことを、それらの比丘たちの前でお説きになり、また更に話されました。

［［かつて］アショーカ樹に棲む森の精霊であった、その者こそが、この善き心をもち偉大な知性をもつ遍歴行者スバドラなのです。〔二二・七三〕

誓願の力によって、この者は私の弟子になったのです。そしてまさにその［誓願］により、私の涅槃の前に［彼は］涅槃に入りました（入滅しました）。」〔二二・七四〕

――さあ以上の、この驚くべき不思議なジャータカは、正しい形でシャーキャ・ムニ（釈尊）によって説かれたものであり、賢人たちの心の寂静に役立つよう、甘美な［声の］語り手によって［誦唱されて］弘められるべきものです。〔二二・七五〕

利他を行うために勝れた誓いを宣言した者たち（菩薩）は、危難の中にあっても『勇猛な精進』という甲冑の縛り紐を解くことはありません。そのことによく思いを巡らせて、あなた方は究極の境地（仏位）を得るために、世の生類を利益する行為において、決して怠惰であってはなりません。〔二二・七六〕

『鹿ジャータカ』、［第三部類の］第二話［終わる］。

第二四話　薬師ムーリカ・ジャータカ

憐愍の心を抱く心優しい人たちは、たとえ敵であろうと病にかかっていれば、見捨てたりしません。まして、あらゆる生き物にとっての［頼れる］友である者たち（菩薩たち）が、途切れなく連続する生をもつ［苦しむ］生き物を見捨てるでしょうか。〔二四・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。― (a)ヴェーダとヴェーダーンガ（ヴェーダ学の補助分）に通暁し、(b)イティハーサ（歴史的伝承）の真実義を知り、(c)最高の真理（第一義、真諦）を願求し、(d)あらゆる生き物に同情を寄せる、ムーリカ（「［薬草の］根を採る人」）という名の婆羅門が、菩薩（釈尊の前世）として、おりました。その偉大な心の方は、病人たちの疾病を鎮め治してやるため、ヒマヴァット山（ヒマーラヤ）・マンダラ山・パリヤートラ山・サヒヤ山・ヴィンディヤ山の森の奥を、薬草を得るために歩き回りました。

ある時炎暑の季節にその彼は、蛇たちが［盛んに］巻きついている栴檀の稠密な林を眺めながら、(a)峰々の先端で［雲の走りが］ぶつかって千切れてしまった雲のうす膜がある、(b)［其処に］シッダたち（飛行能力をもつ半神の種族）が棲む、マラヤ山をほうぼう歩いていました。〔二四・二〕

幾つもの洞穴の入口で、鸚鵡たちが嘴で新鮮なコショウの実を砕いては下に落としているのを眺めながら、また風が［あたりに］漂わせている花の香りを嗅ぎながら、思慮深い彼は、疲労がとれるのを待って、岩の上に坐っていました。〔二四・三〕

◇　疲れがとれると、彼は立ち上がって、大効能の薬草の根をシャベルで掘りました。そして大量の薬草の荷物を束ねてから、「さあ今、帰ろう。薬草を与えて、人々を無病にしてあげよう」と、そう考えながら、マラヤ山から出立しようとしている時、彼は、(a)一人の、はなはだ衰弱して体が青白く痩せ細った、(b)傍らに水瓶と鉢を置き、(c)

古びて萎れた草の敷物の上に坐っている、(d)また［その座の］手前に番いの鹿たちが踞った、(e)夜明けの薄明に似た［茜色の］衣で身を覆った、(f)感官をよく鎮めている、独覚（辟支仏、縁覚）を見ました。

寂静なる［姿の］かの独覚を見て、礼儀を遵守する彼は、薬根の大きな荷物を肩から下ろすと［跪いて］、地面の塵を付着させたその頭から多量の尊崇と敬信の思いを遠くまで発出するかのように、［深々と］拝みました。〔二四・四〕

病によって肢体が痩せ細ったかの比丘は、彼に対して健康を祈る挨拶をまず述べてから、このように語りました。「生類の苦を鎮めるために、輪廻を断ち切った仏の境地をあなたが得られますように。」〔二四・五〕

かの婆羅門（ムーリカ）は、その［聖者］にこう尋ねました。「［あなた様の］聖なるお体は［病に］衰弱されているようにお見受けいたします。」――すると独覚は、亢進する病に侵害されたか細い声で、彼に答えました。〔二四・六〕

「(a)業の相続の流れによって作り上げられた、(b)［常に］生類を苦しめる無数の『病』という蛇たちによって棲まわれている、この『肉体』というものは、蟻塚の塔のようなものです。〔二四・七〕

人間の『肉体』がこの『老い』という雌ライオンに襲われた時、『心』という雄象は、感官の享楽を失って、落胆して、［若さという］酩酊状態（雄象のマダ）を捨てるのです。〔二四・八〕

そののち、いわれなく襲いかかる別の敵としての『死』が、『肉体』というみすぼらしい家を壊してしまいます。それが壊された時、人々にとって瞬時にあらゆる活動の終止があります。〔二四・九〕

業によって動かされている、これら三者の『病』『老』『死』という敵によって、人々は苛まれています。それ故、絶え間なく『煩悩』の火を発する、［苦しい］この『輪廻的生存』を、聖者たちは望みません。〔二四・一〇〕

以上から、省察することに長けたあなたは、『輪廻的生存』が蛇のように恐ろしいものであると省察して、［輪

廻のない」『寂静』の道へと志願を固めて、『勇猛なる精進』という車に乗りなさい。」〔二四・一一〕

◇　その時菩薩は、「何と見事に説かれたお言葉（善説）でしょう」と述べ、その独覚を誉め讃えて［次のように］言いました。

「『見事に説かれた言葉』（善説）という、［その輝きが］無明の闇を破るものである、宝石の獲得は、澄んだ深い思考の水をもつ『聖者』（サードゥ）という海以外の所では、ありえません。〔二四・一二〕

法（教え）において、善き人から励まされた時、人の『勇猛なる精進』はいっそう力強いものになります。まるで海の中で、巧みな舵手がいる一艘の船が、風に後押しされた時のように。〔二四・一三〕

◇　それゆえ、―この衰弱の状態を越えることが出来ますまで、私は尊者をお世話いたします。大きな曠野の危険な場所を越えるのを［無事に見届ける］ごとくに。」―　そう語った後、

やがて眩しく輝く光輪をもつ太陽が中天に近づいた時、―

木蔭に腰をおろした、目尻のところが白い孔雀たちが［苦しげな］呼吸に喘ぎながら、舌と喉の口蓋を見せる時、―

雨水をかかえた雨雲のように青黒い色をした野生の水牛の群が池の水の中に降りることを欲する時、―

蛇たちがよい香りがする冷たい栴檀の木の枝に甚だ［びっしり］絡みつく時、―

猛烈な太陽光の、まるで［総てを］抱擁するかのような熱射によって熱せられたおびただしい塵に覆われた道の上から、旅人たちがついに逃げ出す頃、―

［その酷暑の中を］彼はマラヤ山の樹々が［托鉢先の親切な］家長たちであるかのように与えてくれた、熟して柔らかく芳香ある、様々な果実という［森からの］托鉢食を運んで来ると、

太陽の熱射を和らげるため、彼はパラーシャ樹の葉から大きな日傘を作って、独覚の上に差し掛けました。〔二四・一四〕

「巧みな手を知る（善巧方便なる）商人は、労苦をものともせず、四方を歩き回って、大きな利を得るものだ。」―〔二四・一五〕

そう菩薩は思いながら、その［独覚］を世話するために、［自らの］飢えも、猛烈な太陽の熱射も、疲労の苦しみもいっこう気に懸けませんでした。〔二四・一六〕

「生類の師である賢者たちにお仕えすることが無ければ、『見事に説かれた言葉』（善説）を人々が得ることはない。財を求めて、宝石が採れる土地に行った者［だけ］が、格別な宝石という大財を入手できる［ように］。」〔二四・一七〕

そう思い、不屈の性格をもつ彼は、福果の蓄積のため、聖なるお方（独覚）の身の回りの世話をしながら、毎日、浄信（信仰心）の高まりを感じ得て、甲斐がある人生を得たものと、［自ら］満足しました。〔二四・一八〕

◇［ある日］かの独覚は、さらに倍増した浄信を菩薩に生じさせるため、虚空に昇って、あれこれの奇跡を示現しました。

きらきらと輝いている、光に包まれた体で、彼は清らかな天空の中をまるで水の中にいるかのように横切りました。蓮華の座席の中央に坐っているかの自在者は、まるで黄金の山（スメール、須弥山）の如く輝かしく見えました。〔二四・一九〕

また繰り返し、大地を割って地中に入り込んでは、太陽のようにゆっくり再び揚がってきました。また彼はヨーガの力により、両腕から水と火焔を同時に［出して］どんどん増やしました。〔二四・二〇〕

誕生（再生）の危難が無くなった［かの聖者］は、揺れ動く［指の］爪が輝いている、蓮華のような手で、太陽に触りました。またその清浄な体を［分身させて］、まるで沢山の水溜まりの中に［映る］太陽のように、数を増やしました。〔二四・二一〕

こうして大神通力をもつその方が、熱くない太陽のように光り輝いているのを眺めて、長い間［瞬きもせず］両眼を凝らしていた、最上の婆羅門たる彼（菩薩）は歓喜を得ました。〔二四・二二〕

神変によって［心を］甚だ喜悦させる偉大な力をもつ、かの独覚を眺めて、空を飛行しているヴィドゥヤーダラ族の者たちは堅い浄信の心を得て、［彼の頭上に］葯の花粉で［花弁の］内部が黄褐色に染まった花々を撒き散らしました。〔二四・二三〕

◇　その時菩薩は大地に跪いて、大きな悦びに満ち溢れた心で、頭に両手をかざして合掌し、輝かしい宝石のような言葉をもって、その独覚を誉め称えました。

「あなた様の、神変を有するこのお体を見て、ブラフマー神（梵天）すら驚愕することでありましょう。まして私のような凡夫はいうまでもありません。〔二四・二四〕

神通を示して熱光で輝いているあなた様が［空の上に］おられる間、かの空はまるで二つの太陽を有したかのようでした。〔二四・二五〕

利他を成し遂げるのに巧みな、あなた様のようなヨーガ行者たちが持たれる、驚嘆すべきその神通の偉大さが明白となりました。〔二四・二六〕

『東』の［女神の］顔の額飾りである月ですら、自身のために輝いているのではありません。浄らかな心をもつ偉大な者たちの出現は［すべて］、他者を利するためなのです。〔二四・二七〕

もし私が、栴檀の木々によって［昼も］暗いこのマラヤ山に来なかったなら、あなた様をお世話することによって生じた善（善根）を、解脱への道の種子として、得ることが出来なかったでありましょう。〔二四・二八〕

おお煩悩を滅された方よ、大変な超自然力があって堅重なるこのお体をお持ちであるあなた様は、きっと私に恩恵を施すことを意図なさって、病を口実にして、マラヤ山の森の中に居られたのでしょう。〔二四・二九〕

海は光燦めく宝石たちを［水底に］保有しています。雲たちは水晶の断片のような明るく澄んだ水を持っています。樹々は莫大な果実という富を有します。そしてあなた様のような方々は、利他のために、久しい寿命をお持ちになるのです。〔二四・三〇〕

［この］言葉の連なりをもって、あなた様に『徳性の讃歎』という花環を編んだことによって、私が善根の果を得たのでしたら、どうかそれによって私が［未来に］智慧の座である仏位（十力たること）を獲得して、これらの生き物たちが輪廻的生存を断つ原因となれますように。〔二四・三一〕

◇　その時その独覚は、かの婆羅門の［発した］、仏位を獲得せんとする誓願を聞いて、心悦び、その場で消え失せました。菩薩は［聖者に仕える事の］大利を達成し、

独覚の足［が触れた地の］塵に頭をつけ、浄信の心に体じゅうの毛が逆立った彼は、薬草を手に取ると、人々の病を治すため、マラヤ山の森の中から人里へと降りてゆきました。〔二四・三二〕

◇　―さあ、このように、かの世尊（釈尊）は菩薩であられた時に、世のあらゆる人々の苦悩（煩悩）の病をなくそうと欲し、憐愍の心に強く駆られた『勇猛なる精進』の力を持って、自らの強い疲労を気にかけることなく、病に衰弱した独覚の介護を行ったのです。それ故、善業の果を願う良家の子は、病に衰弱した者たちの看病に無関心であってはなりません。

『［薬師］ムーリカ・ジャータカ』、［第三部類の］第四話［終わる］。

第二六話　ジャージュバリン仙人ジャータカ

［菩薩は］『禅定』という灯明の輝きによってすでに光明を得ていても、［輪廻界に留まって］涅槃に入りません。彼が菩提（悟り）を得たいという心を抱いているのは、それが生類を益することにつながるからなのです。〔二六・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　或る時、(a)ヴェーダの本義に通じ、(b)様々な学問の書を繰り返し学ぶことで清らかな知性をそなえ持ち、(c)多くの学者の集会場でその名声が広まっている、(d)自らの職務の執行に専念し、(e)家住期（家で社会的な活動を営む生活期）に住する、ジャージュヴァリンという名の婆羅門が、菩薩（釈尊の前世）として、おられました。偉大な心をもつ者である彼は、家庭に住することの欠点を知っており、寂静（心の聖なる静穏、離欲の状態）の安楽を願っているため、富財に満ちた住まいの中にいても喜びを得ることがなく、或る時、次の様に考えました。

［富財があれば、驕慢が生じる。その［驕慢］があるとき、どうして寂静がありえようか。寂静がなければ、人は恥じる気持ちもなく、汚れた行為を欲する。〔二六・二〕

［生には］何度でも、憎む者と会うことの苦しみがあり、何度でも、愛しい者と別れる時の苦悩がある。富を得ることに憔悴した心でいる者たちは、もしその願いが叶えられなければ、懊悩する。〔二六・三〕

かように、(a)絶えず［心を］かき乱されていて、(b)自分の家族への愛情に心が縛られており、(c)『［これが］幸福である』という不毛なる自己錯覚を抱いている、家住者たちにおいて、家庭での真の幸せなど［実は］ほんのわずかもあり得ない。〔二六・四〕

それゆえ私は自己を大切にする者として、『家庭』という名の、この忌まわしい枷をすみやかに捨てて、苦行力

の増大のため、寂静の場である森の奥地に居場所を求めることにしよう。」〔二六・五〕

◇　このようにかの偉大な心をもつ者（菩薩）は考え、家庭に住むことを放棄して［苦行林に独り赴くと］、おだやかに水を流して、花咲く岸辺の樹々に飾られ、まるで学問の書を繰り返し学ぶことで清らかなものとなった智慧［そのもの］を思わせるような一本の河によって美しく装飾されている、山中の一つの地域において、(a)不安なく憩っている鹿たちの歯が噛みしだく若草の繁みが美しい、(b)睡蓮の叢りに隠れているカラハンサ鳥・カーダンバ鳥・チャクラヴァーカ鳥たちが装飾する、(c)ヨーガ行者の心によく適う、(d)或る土地の甚だ大きな森の中において、―［彼は］或る一本の樹の下に坐ると、ヨーガによって集中した心で、苦行を始めました。その、黒い羚羊の皮によって胸が斑になった彼［の姿］は、あたかも［彼の体という］勝れた居場所を獲得して満足した『バラモンたることの光輝』［という聖なる尊格］によって抱きしめられているかのようであり、まるで『知足』［という徳性］そのものが［地上で］肉体を具現化しているかのように見えました。

(a)禅定によって一点に集中した心をもち、(b)諸感官を制御し、(c)知足を得て安らかであり、(d)憐れみの心をそなえ、(e)気高い心をもつ、その婆羅門が［修行のために］坐したその樹は、まるで自分の存在する意義が達成されたと嬉しく感じているかのようでした。〔二六・六〕

草を撒き拡げて［座を作り］、禅定者たちの最高［熟達］者として、鼻先に目を固定し、心を一縁に集中した（心一境となった）彼は、念ずべき［対象］に思いを凝らしました。〔二六・七〕

［それは］『精進波羅蜜』という道を［これまでに］踏破してきたことによって溜まった疲労をもつその勇猛なる賢者を、［今度の］『禅定波羅蜜』が休養させるかのようでした[15]。〔二六・八〕

彼は［修行］道を達成するために、(a)欲望の対象と不善なる諸法をそれぞれ離れた、(b)『尋』（粗なる思考）と『伺』（微細なる思考）をもつ、(c)遠離から生じる、(d)『喜』と『楽』とを味わう、『初禅』［の境地］を、(a)清浄

な心の、(b)『寂静』という甘露を味わう、禅定者として、獲得しました[16]。〔二六・九、一〇〕

『伺』に習熟した彼は、その後、自己の内なる澄浄によって、『無尋』にして『無伺』なる第二禅［の境地］を得ました。〔二六・一一〕

(a)次第に『喜』の愛著を捨て、(b)『正念』あり、(c)『捨』（平静にして平等無私の状態）をもつ、かの賢者は、身体の『楽』を味わう、第三禅［の境地］を得ました。〔二六・一二〕

『楽』と『苦』が無くなることによって、(a)『捨』によって清浄であり、(b)『喜』に対して無欲になった、第四禅［の境地］に到りました。〔二六・一三〕

◇　このように四［段階の］禅を生じさせた彼が、まるで地上に肉体を具えて現れた『憐れみの心』［という聖なる尊格］によって抱きしめられているかのような姿をもって『寂止』の中に全く没入していたため、［その静謐の姿は］その森の中において動物たちに、まるで［自分たちの］親族であるかのような安心した信頼感を生む成因となりました。

鹿たち、鳩たち、孔雀たち、チャコーラ鳥たち、善い心性をもつ猛獣たち―彼らはそれぞれ、森の奥を逍遥しながら、まるで［彼の］弟子たちであるかのように、彼の傍に行って憩いました。〔二六・一四〕

◇　ある時、(a)結跏趺坐を組み、(b)彼の足元には一つがいの鹿が腰を下ろしていて、(b)禅定の中で不動の目となった、その偉大な心の方（菩薩）の頭に編まれた螺髻（婆羅門族の、髪を巻いて頭頂に束ねたたぶさ）の上に、出産間近の雌鳩が、細い草や木ぎれを嘴で取ってきては置いて、真ん中が少しくぼんだ巣を作りました。［やがて］そこに卵を産み落とすと、草や種子やアシュヴァッタ樹の実などの食物を求めて、空に飛び立っていっては森の中の空間をあちこち回って戻ってくることを何度も繰り返しながら、抱卵して、ずっと留まり続けました。

その後、母鳩の細い羽毛がいっぱい詰まった、また彼女の体が押しつけられることで温かさが保たれた巣の中

で、卵を割って、赤っぽい肢体の鳩の雛たちが出てきました。〔二六・一五〕
それらの雛鳩たちがしきりに食べたがって、繰り返し嘴の先を開くのをその母鳩は眺めて、自分が甚だ飢えていることは意に介さず、アワとニーヴァーラ稲（野生の稲）の実により［彼らを］養いました。〔二六・一六〕
翼の羽が出来つつあるそれら鳩の仔たちは、種をくわえた母を見ると、翼の先っぽをばたつかせ、声をあげながら、口を繰り返し差し伸ばしました。〔二六・一七〕
さて鎮まった感官の、かの聖者は、［長い］禅定を終えた時、薪と果実を得んがために、森の奥に行こうと［立ち上がろうと］しましたが、頭上に巣が載っており、草や木や果実をくわえた雌鳩が坐っているのを見ると、動くのを止めました。〔二六・一八〕

◇ その時菩薩は［考えました］――「私のこの螺髻の上できっとこの雌鳩は草や木片で家を作って、産んだのだろう。もし私が立ち上がって、薪や球根・根・果実を取ってくるため、行ってしまうと、必ずやこの苦労している女（母鳩）がこの場所に戻ってきた時、――
これらの［大口を開けて］赤い口蓋を晒している鳩の仔たちが見えないので、今日、悲しんで樹々にとまっては、繰り返し空に飛び上がって、あちこち彷徨うことになってしまうであろう。〔二六・一九〕
ああ、数百の生を［輪廻して］彷徨う間、［すべての生き物の心に］この『薫習』（過去に為された行為が潜在心に植えつけた種子）が存続している。そのため、動物であっても、子供たちに対する深い愛情が［自然に］芽生えるのだ。〔二六・二〇〕
もし子供も友も親族もいなければ、『我がものという思い』は滅ぼしうるであろう。『我がものという思い』がなければ、［薫習の］『種子』がなくなるので、［その時］どうして［彼らへの］深い愛情があろうか。〔二六・二一〕
［近しい者への］深い愛情がなければ、様々な懸念が心を覆うことがない。懸念がなくなれば、執着が消えた者

は寂静をそなえて、安らかにあり続けるだろう。〔二六・二二〕

『［私の］子供だ』という想いがある苦悩を起こして、煩悩に惑った、愚かな人々は、後悔に苦しめられながら、［生に］厭い疲れるにいたる。〔二六・二三〕

牡牛が［自ら］欲していないのに、より強力な御者によって無理やり荷車に繋がれているように、同じ様に、愚かな人々は、善業と悪業によって［無理やり］生存の海（輪廻）に投げ込まれている。〔二六・二四〕

それゆえ(17)、―私の螺髻を家とする鳩の仔たちが、よく育った羽をもつようになるまで、私は『禅定』という不死の甘露（アムリタ）に満たされた心と身体の満足を味わいながら、不動の姿で、この場所にずっと留まっていることにしよう。」〔二六・二五〕

◇　このように菩薩は考えを巡らせると、鳩の仔たちへの憐れみの心から、［自身の］飢えを無視して、再び結跏趺坐を組むと、禅定することの安らぎをもって自らの心を楽しませました。

［その後］鳩の仔たちの翼の羽がよく育ち、母と一緒に空に飛び上がって、遂に立ち去ったとき、彼の近くに棲む精霊（デーヴァター）が近づいて、菩薩を眺めて、驚きに占められた心で［思いました］―「ああ、この気高い心の大仙人はなんと生き物たちに憐れみの心をお持ちになっていることか。このお方は先の禅定から出た後、雛たちを守るために再び禅定［に入ること］によって、ご自身の体を不動にして、じっとそのままでおられたのだ。しかもこの偉大な心の方（菩薩）は、無事に［育った］雛たちが立ち去ってしまったのに、その巣を頭から取ろうともしないでいる。…そこで私はこのお方の螺髻の冠の上に作られたこの鳩の家を取り去ってあげよう。」―そう考え、内側にあちこち卵の破片が散らばっているその巣を、その［森の精霊］は、至高の仙人の頭から、生えたばかりの若枝のように柔らかな両手で、しずかにそっと取り除いてあげました。〔二六・二六〕

◇　その精霊が立ち去っていった後、菩薩が禅定［への没入］から心を戻した時、［彼は］頭の上が軽くなっている

のに気づき、次のように考えました。

「羽がよく育った鳩の仔たちが母と一緒に森の奥に去った後、きっとどなたか、敬信に満ちた者が、彼らの家を私の頭の上から取り去ってくれたのだろう。」〔二六・二七〕

◇　そう考えを巡らせると、かの偉大な心の方は起ち上がって、薪・クシャ草・花・果実を採ってきてから、灌水（水垢離）を行いました。

［彼は］正午に、火花を燦めかせながら立ち上がった炎のもえる火の中に供物を献げてから、泥を少しぬぐい取った芳しい果実を食べると、一本の樹の下で、鼻先に視線を置いて心を一点に集中し、再びまたヨーガを始めました。〔二六・二八〕

◇　―さあ、このように、禅定により真実を観て、すでに［いつでも］涅槃に進むことができたにもかかわらず、かの世尊（釈尊）は、かつて菩薩であった時に、世の生類の利益のために［自ら願って］多くの危難がある輪廻の中をめぐり続けておられたのです。そのことをよく考えて、［あなた方は］世尊・仏に対して最高の浄信を起こしなさい。

『ジャージュヴァリン［仙人］ジャータカ』、［第三部類の］第六話［終わる］。

第三二話　ライオン・ジャータカ

たとえ草の葉一枚であろうと、賢者たちは他の人から預けられたものを最大の努力をもって守ります。まして生き物［の命］を預かったなら、智慧の導師たち（菩薩）がどうして労苦を惜しまずに守らないことがありましょうか。〔三二・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　(a)白く輝く銀の円柱に似た姿の雪をかぶった峰々の尖端にぶつかり千々に割れ裂けた雲がある、(b)真珠の砕かれた粉の集積のように真っ白い雪の上を猟師たちの一群が辿ってゆくヤクたちの蹄の足跡がある、(c)またシヴァ神の雄牛（聖牛ナンディン）の角に掘り返されたかのように［大地が］上下に起伏している様々な姿の峡谷があり、(d)無数のブールジャ樺・サララ松・デーヴァダール杉・金剛菩提樹・パドマカ桜の林に暗緑の色合いをもつ茂みがある、(e)また流れ出る滝の水に洗われている低地があり、(f)夜になると薬草たちが光り輝いてまるで数千のランプを灯したかのようになり、(g)ヴィドゥヤーダラ族の男女が愛を楽しんで［彼らの］芳香が内に籠もったマーナサ湖（チベットの聖湖）の岸辺の端に立つ蔓草の東屋の内部がある、(h)また或る場所ではライオンの前足の掌に打ち倒されて恐怖し慄いている一匹のニヤンク鹿の足が足掻いたために［地面から］掘り起こされた草があり、(i)また或る場所では女神ウマーの［踏んだ］足裏の赤い紅（臙脂、ラック）［の付着］に印付けられた茂みの［広がる］暗緑の色合いをもつ地所がある[18]、(j)また別の場所では鳥たちの嘴に毀された熟した木の実が散らばっている林の内部空間があって、(k)風によって吹き散じられた大小［様々な］花たちの香りが芳しく、(l)また春になって［一斉に］樹々にふき始めた蕾や芽葉があり、(m)ミサゴが急降下する音に恐怖して鳥の群がちりぢりに飛び去ってゆくガンガー河の岸辺の水がある、(n)また［仲睦まじく］遊ぶキンナラ（楽神ガンダルヴァの一種、半人半鳥の妖精）の夫妻の歌声をじっと動かずに聴いている鹿たちの群のいる、(o)乳海の高い波頭のごとく峰々が高く聳え立っている、ヒマーラヤ（雪山）の或る一つの地域において、

(a)まるで敬意をこめて樹々が花を供養したかのように［落花に飾られた］門の如き平岩が［入口に］あり、(b)緑の葉と芽葉が吹き出てそのあたりが暗緑色であり、(c)花咲いた睡蓮のある池によってその近隣が美しく装飾されている、一つの大きすぎない洞窟に棲んでいる一頭の―　(a)その首はとても濃いターメリック（鬱金）の液体が注ぎかけられたドゥクーラ布の糸のような黄褐色をしたたてがみに覆われており、(b)新芽のように柔らかく繊細でよく柔

軟に動く舌をもち、(c)少し萎れたアティムクタカ（蔓性のジャスミン）の花の集積のように白茶けた身体をもち、(d)三日月のように先が曲がった鋭い牙をもち、(e)広い胸と太い前足と引き締まった胴をもち、(f)燦めき燃えるカディラ材の木炭のような［輝く］茶色の両目をもち、(g)鷹の嘴のように屈曲した鉤爪をもち、(h)先端［の毛房］が黒っぽい尾をもつ、(i)まるでヒマーラヤ（雪山）の美しい装飾品であるかのような、アニンディターンガ（「どこにも非の打ち所がない者」）という名の、(j)象をも恐れぬ獣である獣王（ライオン）が、ある時、菩薩（釈尊の前世）としておりました。

本性からやさしく、可愛らしい眼をもつ鹿たちは、まるで聖者であるかのように生き物たちに対してやさしい心をもつその［ライオン］の、生まれつきのやさしさを理解して、まるで［自分たちの］親族であるかのように、嬉しげに彼に付き随いました。〔三二・二〕

寂静（心身の静穏）をそなえ、木の皮の［苦行］衣のようなたてがみに覆われて、まるで一人の苦行者のように見えるかの獣王は、鹿たちを従えて、草庵のごとき洞窟の中からゆっくりしずかに出てくると、樹々の熟した果実を食べました。〔三二・三〕

揺れ動く美しいたてがみをもつ彼は、果実を食べるため、ゆったりした足取りで森の内部を歩き回り、まるで客人（行乞する宗教者）を歓迎する大きな家に住む人たちのような、果樹たちから、客人の如くに待ち受けられました。〔三二・四〕

さて雪の季節が終わった時、［かのライオンは］洞窟の中から跳ね出て来て、とても大きなあくびをしたために口腔の奥まで光に曝しましたが、その彼の前にある太陽はまるで［彼への］贈物のように新しい熱光を与えて、ゆっくり徐々に［彼の］肢体に［暖かな］快感を拡げてくれました。〔三二・五〕

「大勇猛のガルーダ鳥が鳥たちにとっての王であるように、この山ではこのお方（ライオン）が獣たちの王であ

る」―そう思って、『夜』は［彼に］敬意を生じて、『月』という白傘（王権の象徴）を彼の頭上にかざすかのようでした。〔三二・六〕

岸辺に立った彼は、川から月［の光］のように澄んで清らかな冷たい水を飲みましたが、その時その川はまるで、「立派にお役に立てた」と自身を思ったかのように、『泡の連なり』［の歯列］をもって輝かしく笑ったかのようでした。〔三二・七〕

ヒマーラヤ（雪山）は、清らかな心をもち偉大な性質の者である、かのライオンが住んでいることによって、嬉しげに「甚だ光り輝くスメール山（黄金の山）よりも自分のほうが偉い」と思っているかのようでした。〔三二・八〕

「ああ、何と大きな隔たりがあることか、［彼が］世界を恐怖させるライオンであることと、その彼が示す獣たちへの甚だ深い憐愍とは！」―［他の］ライオンたちもそう考えて、まるで雪山に棲む一人の聖者であるかのように、かのライオンに稽首しました。〔三二・九〕

◇　さて或る時、かのライオン（菩薩）がまるで［王宮に坐る］人王の如く、(a)すぐ近くで花開いている『蔓』という女の唱い手が『新芽』の指をもって優雅に掻き鳴らしている『蜜蜂の一群［の羽音］』という琵琶の弦音が快い、(b)流れ下る『滝』の太鼓の音に合わせて動く『孔雀』という舞い手たちがいる、洞窟の入口のところに坐っていると、彼の前に、(a)まるで搾り出されたアラクタカ樹脂（足先を赤く染める女の足粧剤）の丸い塊のようなピンク色の口をし、(b)その両眼は新鮮なユカン（庵摩勒）の実にそっくりで、(c)熟したフサナリイチジクを握る二匹の小猿を肩の上に載せている、(d)果汁で手の指をべたべたにきたなくした、猿の夫婦が［来て］、お辞儀をして語りました。

「ああ、あなた様の、体と言葉と心（身口意）における行いは、非の打ち所がありません。アニンディターンガ―どこにも非の打ち所がない者―というあなた様のお名前は、ぴったりであると皆が認めております。〔三二・一〇〕

ああ、徳ある者たちの最高者よ、あなた様の徳性である、施与や忍辱や勇猛な精進、［お人柄の］深い真摯さや憐れみ深さなどは、聖者たちをも越えています。〔三二・一一〕

ああ実に、清らかな心をおもちのあなた様の清らかな生き方（日常の振舞い）によって、残忍な［獣］たちの心すら、甚だ柔和さへと導かれました。〔三二・一二〕

自性として思慮深いあなた様が住んでおられることによって、雪をかぶった岩盤をもつこの聖なるヒマーラヤは、なんと幸せな場所になっていることでしょう。〔三二・一三〕

それゆえ、―［その］あなた様に、恐ろしい捕食獣たちを目にしては震え上がるこれら二匹の子猿をお預けして、私たち夫婦は果実を求めに、森に出かけましょう(19)。〔三二・一四〕

果実を採って私たち夫婦が森の中から帰ってくるまで、これらのせわしなく体を動かしている［子猿］たちを、あなた様は守ってやってください。〔三二・一五〕

猿たることと、いつも落ちつきがないこと、この二つは［分離できない］同時のものです。それゆえ、これら二匹がもたらすであろう悩苦を、あなた様はどうか暫しの間、我慢なさってください。〔三二・一六〕

智者たちは、利他の達成のため、自らの安楽を顧みずに、極度の苦しみをも耐え忍ばれるものです。〔三二・一七〕

心怯える者たちから甚大な危難を取り除くことを願っているお方が、己が心を苦しめる悩ましい出来事をどうして忍受しないことがありましょうか。」〔三二・一八〕

このようにその猿の夫婦から、子らのお守りをするように言われると、かのライオンは、人王の如く他の者たちを守護することには慣れていましたが、しばしの間困惑して、次のように考えました。〔三二・一九〕

◇「他の者から預けられた物品が、たとえどんなに巨大に積まれた黄金の山であっても、私は守りきることが出来よう。しかし落ちつきのなさを本性とするこれら二匹の小猿を、どうやって守れようか。だが、輪廻界の危難から

あらゆる生類を守ろうとしているこの私が、『この二匹はとても守りきれない』と、そう思案しているのはそもそも理に合わぬことだ。」―このようにかの偉大な心の方（菩薩）は考えて心を決めると、その猿の夫婦に語りました。

「では行きなさい。高い峰々の頂きが天空の中央をかき裂こうとしているかのように［聳え立つ］あのヒマーラヤ（雪山）にあなたたちが分け入って、甘い果実を大至急持って帰れるように、私が愛情をもってこれらの二匹の子を守っていてあげよう。」〔三二・二〇〕

◇　その猿の夫婦はそれら二匹の子を菩薩のもとに委ねて、［子らを］なだめすかしてから、大急ぎの走りで、果実を採集しようと［去り］、ヒマーラヤの森の内部をあちこち巡りました。

その親猿たちが去ってのち、すぐにその二匹の小猿たちはライオンであるかの偉大な心の方（菩薩）に対して、父親であるかのような親しい愛情を抱くようになりました。アニンディターンガはよく熟して美味い果実をそっと軽く牙の端で挟むと、彼らに与えました。しかし本性上の落ちつきのなさから、その二匹はかの偉大な心の方をあれこれの悪戯で悩ませました。

洞窟の外庭と接する、涼しく快い風がある美しい林で、うとうとと眠気に誘われているそのライオンの、しばしの居眠りの快さを、それら二匹の小猿は［甲高い］喚き声によって、何度も繰り返し壊しました。〔三二・二一〕

更に二匹は、眠くて少し閉じているかの［ライオンの］火花のような金色の瞳がある両目を、指で突ついてみました。〔三二・二二〕

またその二匹は恐れずに[20]、気持ちよく坐っている彼の傍にずっと留まって、その尻尾の端の房をつかむと、何度も強く引っ張ってみました。〔三二・二三〕

その二匹はまた、彼のたてがみにぶら下がって、その背中に乗ると、生まれつきの落ちつきのなさから、何度も何度も遠くまで、跳んでは落ち、跳んでは落ちを繰り返しました。〔三二・二四〕

またその二匹は、目の前に沢山の果実があるのに、［ライオンが一つを］食べようとすると、彼のその口からわざわざ果実を掻っさらいました。〔三二・二五〕

このような、それら二匹の小猿がしでかす、あれやこれやの悪戯を、彼は自分の子の［悪戯］であるかのように、憐れみと善良な心をもって耐え忍びました。〔三二・二六〕

どんな時にも平静な心を保ち、［自身の］楽も苦も顧みない、すべての［生類の］導き手である気高い者たちの心は、どんな状況でも疲れくじけることがないのです。〔三二・二七〕

◇　そうこうしている時、［不意に］(a)ひどく剛く粗い大羽を打ちはばたかせ、(b)先が曲がった固く鋭い鉤爪をもち、(c)両眼が生まれつきの本性から獰猛そうである、(d)どこにも肉の食物を得られぬまま空を旋回していた、(e)研いだカミソリ（クシュラ）のように鋭い嘴をもつ、クシュラカという名の鷲が、激しい音を伴った凄まじい速度であっというまに降下してきて、(a)菩薩の近くにいた、(b)果実を味わうため白い小さな歯の並びを盛んに動かしていた、(c)［その瞬間］恐怖を露わにし引きつった顔でとても痛ましい声を上げた、小猿たちを両足で捉えて、たちまち空に飛び上がり、ヒマーラヤ（雪山）の頂へと消えてゆきました。

菩薩は「ああしまった！　ああ何ということだ！」と声を発し、［考えを巡らせました］―「もし私が勇猛を発揮して、あの鷲に攻撃をしかけたとしても、あれは再び飛び上がって、どこか、より険しい他の山頂に降り立ち、あの二匹の小猿たちを殺してしまうに違いない。どうやっても私はあの二匹の小猿たちにまみえることが出来ない、(a)激増する痛みに眼を動転させ、(b)痛ましい悲鳴をあげて、口腔の奥まで見せながら、(c)腹から流れ出した血で体毛をびっしょり濡らし、(d)飢えた鷲に肉を引き裂かれてしまう［あの小猿たち］を。〔三二・二八〕

あの二匹の小猿が、あの鷲によって欲しいままに肉を千切り取られてしまった時、私は果実を採って戻って来た彼ら［両親］の前で今日、何をどう話すことが出来るだろうか。〔三二・二九〕

［こう、とぼければよいのか。］一体、あの落ちつきのない二匹は池の水を飲みに行ったのでしょうか。果実のために樹に登って坐っているのでしょうか。それとも、一体、山のあの洞窟の中に入ってしまったのでしょうか。あるいは何かの猛獣にここらで殺されたのでしょうか、と。〔三二・三〇〕

「獣王よ、なぜあなた様はうつむいたまま、ずっと黙っていらっしゃるのですか。どうかおっしゃってください、あれら二匹の子はどこに行ってしまったのかを。」―そんな、苦悩する眼をしたあの猿の夫婦が語る、［不安に］ひどく震えている一語一語の言葉を、どうして私は聞けるだろうか。〔三二・三一〕

そしてとうとう遂に、あのジャスミンのように真っ白な歯並びをもつ子たちがもういないことがのみこめた時、かれら［夫婦］は悲しみに襲われて、まるで釣り針によって［地に］引きあげられた魚のように［のたうち］身を震わせるに違いない。〔三二・三二〕

◇

だから、私は思う、―ここは行動しなければならない時だ、と。

あの鷲が、虎の鉤爪に形が似た嘴で、恐れ慄く二匹の小猿たちの腹を裂いて、腸を引き摺り出さないうちに、私は行って、雪山の峰の突端に坐り、顔を上に向けて、方便（巧みな導入）から始めて［優しい言葉で］なだめながら話すことによって、彼を善法の立場へと導こう。」〔三二・三三〕

◇

そう考えを巡らすと、かの偉大な心の方（菩薩）は鷲の近くまでやって来て、話しかけました。「おお、勝れた鳥よ、それら二匹の子は両親から私の手に預けられたものです。そのため、歯が剥き出しになった哀れな顔をして、痛ましい声を発している、それら二匹をあなたは死なせてはなりません。

きっとあなたにも、子供たちがいるか、あるいは子供たちをもったことがあるでしょう。あなたがそれらの者たちに愛情を抱いているように、他の者も同様なのです。〔三二・三四〕

それを思えば、憐愍の情に従い、猿の子たちを殺してはなりません。苦しむそれら二匹を食べても、あなたの

満腹感はいつまでも続くものではありません。〔三二・三五〕

ああ、他者を殺すことで［自分の］厄介な身体を養わねばならないなら、そんな者の生とは、またそんな自己愛とは、何と呪わしいものでしょうか。〔三二・三六〕

無知のゆえに、罪深い性質に満ちた［おのが］身体を愛する想いが生じるのです。無知なる［生き物たち］は、その［身体］を養うために、悪い世界への再生（悪趣）の原因となる業を作ってしまいます。〔三二・三七〕

『われ』と『わがもの』［という想い］を離れることにより、一切［の事象］は空（くう）であると見る者であれば、非実在の妄分別（虚妄分別）から生じる闇質（精神を覆い曇らせる性質、タマス）が、その者の心を妨げることがありません。〔三二・三八〕

［心中の］闇質（タマス）がなければ、［修行の］熟練者は真理に達します。その時、彼は善業と悪業から離れて、解脱へと向かいます。〔三二・三九〕

「ライオンほど肉を食べる者はおらず、残酷な者はいない」と言われていること、それはこの地上において明白な［事実］です。しかしライオンの悪しき胎に依って［生まれた］私でも、この非法たる『生き物を殺すこと』（殺生）を欲しません。〔三二・四〇〕

勝れた鳥よ、［あなたは］ライオンたちが好むこの繁みの中で、ライオンたちに殺されたか、あるいは自然死した獣を、空を旋回しながら見つけ、［飛んで］素早く行ける者として、行ってその肉を食べることができます。〔三二・四一〕

たとえその［生き方の］故に、体を焼き焦がす、焔の切っ先のような激しい飢えを耐え忍ばねばならないとしても、放逸［の生き方］を捨てた者として[21]、地獄落ちにいたる様な、そんな不善の行為をしてはなりません。〔三二・四二〕

(a)［地底の火の］中において、生き物たちの骨や関節がぼきぼきと鳴る音や、ううーんという唸り声が恐ろしく［聞こえる］、(b)多量の火花をいちめんに散らしている、(c)巨大な火焔の赤光が恐ろしい、(d)ゆらめき動く熾烈なる炎の群のある、地獄の火が、賢者たちによって語られる時、それは耳で聞いただけで［聴衆の］人々を苦しめますが、まして［それに］実際に触れることになった時にはどれほど［の苦］でしょうか。〔三二・四三〕

(a)［焼かれて盲いた］眼はすぼまって閉じ、(b)燃え上がる火に接して熱く灼かれた鉄製の釜に深く浸けられ、泣き叫び続けている、(c)煮え立ち激しく沸き立っている油が口と喉に溢れて、(d)［油の中で］煮られ続けている、地獄にいる人を、たとえ［寺院の］壁に描かれた絵であっても、もし見るならば、殺生を好むいかなる者も、悪い世界（悪趣）を得る原因となる様な、その残忍な生き方をやめずにはいられなくなるでしょう。〔三二・四四〕

死後の悪い世界の苦しみを聴聞しても、悪行をやめようとしない者は、人の姿をした牡牛か、石の心臓をもつ者です。」〔三二・四五〕

◇　その時、菩薩による法の説示によって心に清らかな喜びを得たかの鷲は、深く頭を下げると語りました。「獣王よ、あなたによって、この『愚か者のあり方』が明らかにされました。［そこで］今、どうか『賢者のあり方』をお語りください。」―　すると菩薩は彼が清澄な心を得たのを理解して、答えました。「そう願うのであれば、『賢者のあり方』をお聞きなさい。」

損害を被った時でも、大利を得た時でも、また有益な言葉を話す親友のもとにいる時でも、敵の中にいる時でも、また称賛された時でも、誹謗された時でも、また大栄達の時でも、災難の時でも、安らかな静穏さにより、清らかに澄んだ心で決して［態度が］様変わりしない者、―そのような者は、知恵ある者たちよりも上に位置します、あたかも［月や星々や灯りなど］光り輝くものたちの上に太陽が位置するように。〔三二・四六〕

◇　しかしながら、あなたは『賢者のあり方』を聞いて、どうされるのでしょうか。どうかそれら二匹の小猿を解

放してあげなさい。私は自分［の体］をあなたに差し上げましょう。

さあ動かずにいるので、私の肉を食べなさい。血を飲みなさい。目を抉り出しなさい。」―　こう言うと、彼は目を閉じ、ずっと長い間、体を動かさないでいました。〔三二・四七〕

その時神々の王（インドラ）の都の中央にある、一つの太鼓が高く鳴って、空の諸方の空間をその響きによって満たしました。また空中に立ったシッダ族の者たちは、頭を垂れて敬礼し、鷲のために［己が］体を与えたライオンを誉め讃えました。〔三二・四八〕

震えるスメール山（黄金の山）を有する大地［全体］が揺れ動いたので、インドラ神を含めた忉利天の神々は驚愕しました。讃歎の言葉を述べる蛇王たち（龍、ナーガ）はかの［ライオン］の上に花の雨を降らしました。〔三二・四九〕

その時、かの鳥（鷲）はライオンの洞窟の近くに二匹の子猿を［運んで］降ろしてやりました。二匹は鉤爪のせいで体を深く傷つけられていて、少しも動かず、恐怖のあまり気絶したきり、目をつぶっていました。〔三二・五〇〕

その勝れた鷲はおもむろに近づくと、［丁重に］菩薩を起き上がらせました。そして［菩薩からの］教導を受けた存在として、その彼の前に立つと、篤い信奉の心（バクティ）をもって次の様に称賛の言葉を語りました。〔三二・五二〕

「ああ、何という大きな隔たりがあることでしょうか、あなた様の、この高い憐れみのお心と、生き物すべてを戦慄せしめるライオンたることの間には！　あなた様は、どなたにせよ、［きっと］或る一人の聖者が、何らかの特別な理由によって、久しくライオンの姿を取られているのです。〔三二・五三〕

高い智慧にもとづいて、苦と楽とを同等とみなす心をお持ちであるから、［あなた様は自分の］生命を代価とし

て、危難に陥っている他者［の命］を購われるのです。〔三二・五三〕

あなた様のような方々が、善良な者たちの［渡る］しっかりした橋となってくださらなかったなら、生き物たちは深い大きな『苦』の海に沈んでしまうことでしょう。〔三二・五四〕

あなた様のこの度のすばらしい法話を聞いて、今日以後、私は敵たちに対しても憐れみをなすことにいたします。〔三二・五五〕

◇　あなた様にお尋ねいたします。この苦行によっていかなる地位をお望みになっているのでしょうか。」――　菩薩は答えました。

「これら生き物たち［すべて］は、無始の輪廻が［無限に］転じ行くことの疲労と、［生に］逼悩され続ける苦の連続によって、打ちのめされています。［この者たちを］生存の海から救い出すために、私は如来たること（仏位）に向けての、熱い願いをもっています。」〔三二・五六〕

◇　鷲は言いました。「大きな智慧をお持ちになるあなた様にとっては、そのような仏の地位も得がたいものではありません。――どうか必ず、

(a)［人柄が］深く真摯でしかも決して近づき難いわけではなく、(b)善と悪の行為（業）をよく識り、(c)学問書によって開明された知性をもち、(d)利他の活動を愛する心をそなえ、(e)如来たちによる輪廻的生存を断ち切るすばらしい言葉をよく理解した、あなた様のような方々との、私どもの迷妄を滅ぼしてくれる出会いが、どの生存においても、ありますように。〔三二・五七〕

あの洞窟の近くに、私は二匹の猿の子を置いてきました。それ故、聖者よ、いま私が立ち去ることをお許しください。」〔三二・五八〕

◇　菩薩は言いました。「ああ、あなたは何と明晰な認識力をもつ者なのでしょう。私のこの教えをあなたはしっか

り把握されました。

語り手の言葉によって明瞭に［説明］されているのに、理解すべき事を大雑把にすら理解できない者は、学問書の領域における繊細微妙な事がらに対して、知性が空しく疲れ果てるだけです。昼ひなかに家の戸口を、そこに明白に有るのもかかわらず見ることが出来ないでいる、白内障を生じた者は、どうして甚だ微小な針の穴を見れるでしょうか。〔三二・五九〕

教えてくれる者がいるにも関わらず、［学習することを］怠る愚か者は、悪い思考癖（知性が錯誤に歪み曲がった状態）を捨てようとしません。犬の尻尾を何度、真っ直ぐにしようとしても、再び巻いてしまうようなものです。〔三二・六〇〕

(a)明解な学問書によって道を教え示され、(b)知性に錯誤がなく、(c)鋭敏で素直な心をもち、(d)自分の身の回りを［経験を積んだ］巧みな人々に囲まれているところの人は、誤った道に赴きません。あたかも鋭敏で素直な心をもつ象が、自身の身の回りを竹の杖を持った者（象の調教師）たちに囲まれて、誤った道に赴かないようなものです。〔三二・六一〕

この諸感官から成る［身体］は、よく抑制されている限り、賢人に害を与えません。［あたかも］首根っこをつかまれた蛇が、わずかでも害をなすことが出来ない［ように］。〔三二・六二〕

人々に危害を与えたことの［業］果は、悪人たちの上に、［破滅に向かわせる］支配力を劇しく及ぼし始めます。毒蛇がもつ黄色砒素が［自らの］口腔の内に滴下されると、［体を侵し始める］きわめて劇しい毒として働く［ように］。〔三二・六三〕

欲望は、放逸（放漫な生活）によって『諸感官』という敵たちに支配されてしまった人々を、［生の］無意義へと失墜させます。あたかも溶解している黄金の美しい燦めきが、はばたく蛾を火の中に落下させるように。〔三

二・六四〕

諸感官の対象（快楽）への執着は、愚かな人を、スヴァダルマ（各人の生に課せられた義務）の道から落として破滅させます。あたかも実が熟した事が、［柄と］へそがゆるい繋がりでとめられていた果実を、樹の先から落下させてしまうように。〔三二・六五〕

悪人たちの濁った残忍な心と等しいものとして［喩えられる］、毒樹・刀・毒・武器・火が、生来の性質から［他者を］苦しめるものとして、もし存在しなかったなら、［他の］如何なるものによってその喩えがなりたつでしょうか。〔三二・六六〕

理由なく怒って、辛辣に苛烈に語り、眉を吊り上げ、目を顰めた悪人は、あたかも多くの穴から身をもたげる恐ろしい蛇たちのいる蟻塚のごとく、［近寄る人を］ひどくぞっとさせます。〔三二・六七〕

無恥の悪人は、手ひどく他者を傷つけようと、嬉しげに［鞘から］抜き放った、憤怒という砥石で研いだ、鋭利な『言葉』という剣の刃をもって、［彼の］手が届く領域にやってきたどんな者をも苦しめずにはおきません。〔三二・六八〕

(a)久しく『陰険な悪意』（奸詐）という鎧を着込み、(b)自身の『感官』という軍の中にいて［自ら］制御不能になっており、(c)善良な人々に苦しみをもたらし、(d)憐れみを欠いている、悪人たちは、まるで剣の刃のように［人を傷つける］言葉を振り下ろすのです。〔三二・六九〕

賢人は悪人を、たとえ慎み深く見え、甘い言葉で話す者であっても、信頼しません。美しい姿で甘い声を発する孔雀は、もがく蛇たちを喰わないでしょうか。〔三二・七〇〕

もしずっと長く『心』という家族を養育してゆきたいなら、また『知性』という雌水牛を成育してゆきたいなら、『賢者』（よき教師）という雨雲が出現した時に、『善い徳性』という種を『自分』［という畑］に蒔きなさい。

〔三二・七二〕

久しく善人たちと交際して清まった心をもつ人は、自重して、悪人との交際に近づいたりしません。綺麗な青蓮の花々を［自身の］行動範囲とする蜜蜂が、死体の上に決してたかったりしない［ように］。〔三二・七二〕

戦場にいる射手が、矢を過つことなく［当てる］なら、喜悦が生じます(2)。同様に、とても遠くから放つ『徳性』という矢によって、『悪徳』という敵を打ち倒した賢人にも［喜悦が生じます］。〔三二・七三〕

(a)甚だ清澄で、(b)［人に］奪い取られず、(c)贋作が不可能で、(d)高貴なる人々から敬われる、『徳性』という飾りを［自ら］獲た人は、たとえ最高の神々が持っている様々な飾り［を見た時］でも、驚きを生じることがありません。〔三二・七四〕

完璧な幸せを願うなら、あるいは［自身に］諸々の徳性が生じることを願うなら、悪人［との交際］を捨てて、善き友（善知識）に近づきなさい。〔三二・七五〕

卑しい者たちとの交際は、有徳の人にとって決して心を悦ばせるものではありません。聖なる沐浴場の水で身を洗い清めた者にとって、穢い衣が心を悦ばせるものではないように。〔三二・七六〕

(a)［心中の］闇質（タマス）を滅ぼし、(b)生き物たちの罪穢を消滅させる、賢者たちと接することによって、暴悪な者であっても、汚れた本性を捨てて、善良さを手に入れます。海の水は、喉の渇きに窶れ果てた者でも欲しがりませんが、その水も雨雲の内部に置かれると、海の塩辛さをたちまち捨てるのです。」〔三二・七七〕

◇　さあ、ではお行きなさい、あなたが望まれるとおりに。」――そう菩薩に［別れを］告げられて、かの鳥は、その偉大な心の方（菩薩）を右遶すると、高い空に舞い上がって旋回していましたが、［その時］(a)爪と口と髭を血で染めた一匹の虎によってその肉が食われている最中の、(b)厚くついた脂肪で肩が太った、(c)新鮮なムスタ草を食べたらしく口の内部からよい香りのする、(d)地面を掘り返したためか二本の屈曲した牙が汚れ、(e)少し体にも泥がつ

いて汚れている、(f)あまり遠くない距離に降り立った鷲たちが丸く取り巻いている、(g)近くの樹々にとまっている騒がしいカラスの群にも見つめられている、一匹の若い猪を見ました。［鷲はそれを］見ると、次のように考えました。「この虎が満腹するまで食べて自分の棲み処に行ってしまうまで、私は一隅にいて待っていよう。」

彼が待っているとやがて、

うまい具合に、満腹を得て上機嫌の虎が自分の棲み処へ優美な足取りで帰って行ったので、鷲も脂の乗った猪の肉を食べ、そして速やかに自分の巣に戻りました。〔三二・七八〕

キンシュカ（マメ科ハナモツヤクノキ）の花冠（頭飾りの花環）に似た赤いまばゆい光線をもつ太陽が、スメール山（黄金の山）の頭頂にさしかかる［夕暮れ］時に、樹の枝の巣の上でうずくまっては跳ね動いている鳥たちのように［上下に］揺れ動く、柔らかなたてがみの毛先をもつかのライオンは、自分の棲み処へと帰って行きました[23]。〔三二・七九〕

◇　二匹のその小猿がクシュラカの鉤爪によって体に裂傷を負い、わずかしか身動きせず、［心の］昏迷に陥ったまま目を閉じているのを見て、心配に苦しむ彼は、「よし、こうすればよい。水をふりかけてこれら二匹の昏迷を取り除いてあげよう」と考え、

［洞窟を出て］、(a)水辺に棲む鳥たちやサンゴに似た小枝をもつ樹々によって［岸辺が］すきま無く覆われている、(b)睡蓮を求めて蜜蜂たちがゆっくり飛んで来る、一つの池の中へ、黄金のたてがみをもつ彼はざぶりと体を浸しました。〔三二・八〇〕

その大きな池に身を沈めて、すぐに出ると、［濡れて］たてがみが垂れ下がった彼は、幾度も足に踏まれたため［入口近くの］草の繁みがくぼんでいる洞窟の所へと戻って来ました。〔三二・八一〕

鋭い鷲の鉤爪によって体に傷を負ったそれら二匹の子猿の上で、かのライオンは急いで、水を滴らせているた

てがみをぶるっと振るわせました。〔三二・八二〕

ライオンのたてがみの水が振りかけられると、二匹の小猿は［心から］重い昏迷が消えて、意識を取り戻し、仰向いている顔の口をひくつかせると、目を開きました。〔三二・八三〕

鷲をひどく恐怖して、体を縮こめてぶるぶる震わせた二匹は、獣王の足下に来て身を寄せました。かのライオンは、柔軟に動く若芽に似た美しい舌で、愛情深くその二匹を幾度も嘗めてやりました。〔三二・八四〕

よく熟して茎から落ちた果実を［小猿たちに］食べさせて、彼はまるで自分の子のように愛情をもって幾度も慰めいたわりながら、蛍たちの灯火がさまよい飛ぶ自分の洞窟の中に入り、一晩中、それら二匹を抱きしめながら安らかに眠りました。〔三二・八五〕

◇　やがて次第に、ジャスミンの花鬘の頭飾りが色褪せたような白色の月が、西方の空の空間から離れ去ってゆく時、―

自分たちの居住地である土地で［眠りから］起き上がった鹿たちの歯が草の若芽を噛み始める時、―

夜明けの薄明かりに、海の水が朱に染まり始める時、―

星たちの群が［霞んで次第に］まばらになってゆく時、―

睡蓮の叢りが目覚め開いて、池がいっそう美しいものになる時、―

樹々の枝に降り来た孔雀たちの振り動かす尾羽が森の空間をいっそう美しくする時、―

夜がついに立ち去っていった時に、［ライオンの］洞窟の近くの樹々の蔓の花のまわりを飛び回る数列の蜜蜂たちの群［の羽音の唸り］は、非の打ち所がない（アニンディタ）行為をなしたアニンディターンガを、まるで敬意をこめて讃え歌っているかのようでした。

純金の壺のような太陽が東の方角に現れ出た時、垂れたたてがみを振り動かしながら、かの［ライオン］は二

匹の小猿を伴って、ゆっくり［洞窟から］出てきました。〔三二・八六〕
その時、果実を持った猿の夫婦が、果実に貪欲な自分の子たちに早く会いたいと心嬉しく、切望しながら、ライオンの住まいへと急いでやって来ました。〔三二・八七〕
たどり着いて、お辞儀するその夫婦に、ライオンは自負の高慢心を起こすことなく、同情しながら、穏やかに話す者、世間をよく知る者として、安否を問う挨拶から始まる優しい言葉を語りました。〔三二・八八〕
彼は小猿たちについて、起こった事をすべてその通りに順々に話し、そして最後に、彼ら二匹が鷲に掠われてしまったことを話しました。〔三二・八九〕
二匹の子が越えてきた災難を猿の夫婦は懊嘆をもって聞き、鷲に傷つけられた彼らの肢体に触ってみました。〔三二・九〇〕
夫婦は、称賛を含んだ、［感謝の］情に暖かく濡れた次の言葉を、ライオンに語りました。「あなた様は二匹の子を守って下さりましたし、また［そのことによって］私たち夫婦をも救って下さいました。〔三二・九一〕
(a)『法話』というガンガー河（ガンジス）を生じて流れを拡げ、(b)『徳性』という諸々の高峰を旗印（目立った特徴）とする、(c)『名声』という［白く輝く］雪に覆われている、あなた様はまさに動く（生きた）ヒマーラヤです。〔三二・九二〕
あなた様がお持ちになる、その数え切れないほど沢山の徳性が、体の中におさまりきらずに、『たてがみ』の姿になって体の外に出ているのだと、私にはそう思えます。〔三二・九三〕
ガルダ鳥（巨大な神話的な鳥）は下降する時に、海の静かな水を波立たせてしまいます。また月の光は、厚雲に覆われた時には現れ出ることができません。しかし罪穢を消し去る［戒律的に］確固たるあり方に住する、あなた様の清らかなお心を、激質（精神を波立たせる性質、ラジャス）も、闇質（精神を覆い曇らせる性質、タマス）も、

別様に変えてしまうことはできません。〔三二・九四〕

私らの二匹の小猿たちを守ることで、あなた様が得られた善業はとても大きなものですが、それによって、お求めになっている果（仏果）を［あなた様が］得ることがどうかできますように。〔三二・九五〕

それでは、私どもはあなた様が懸命に守ってくださったこれらの子猿たちを受け取り、沢山の［猿の］親族たちに満ちた深い繁みがある、自らの森の内奥の住まいへと去ることにいたします。」〔三二・九六〕

「では行きなさい」と、かの［ライオン］から返答を戴いた、名残惜しそうなその二匹の［夫婦］は、篤い尊崇の心をもってかの有徳なる者に向かって拝礼し、背中に小猿たちを乗せると、その静寂の場所から森の奥へとゆっくり静かに去って行きました。〔三二・九七〕

立ち去ってゆく両親の背中の中ほどに乗って、しっかり肩の体毛の繁みにつかまっているその二匹［の小猿］は、ちらと目を後ろに向け、名残惜しげに何度も何度もライオンを見ました。〔三二・九八〕

あらゆる預かり物のなかで最も貴重なその預かり物を返し終わって、『最も貴重な本質（不滅なる本質）の智慧』の領域に住むかの［ライオン］は、やっと肩の荷を地に下ろしたかのように、心の疲労感を拭い去って、大きな歓喜を味わいました。〔三二・九九〕

生き物の命を預かって守り続けることよりも骨の折れることは、他に何一つありません。しかしそれを［無事に］返すことによって得る幸福感は、人にとって他に［匹敵するものが］ありません。〔三二・一〇〇〕

◇ ―さあ、このように、かの世尊（釈尊）は動物に生まれた時においても、［他の］命を預かって、長い間守られたのです。このような境遇にあっても［かのお方は］、智慧を徐々に蓄え高められたのだということをよく考えて、あなた方は、かのかの救護者（仏）から、［すでに］『教え』（法）という預かり物をしっかり預けられているのですから、もし幸せを願うなら、その［預かり物］をどこまでも守ってゆかねばなりません。〔三二・一〇一〕

『ライオン・ジャータカ』、［第四部類の］第二話［終わる］。

【注】

（1）今回の和訳にあたって、第二二、二四、二六、三二話の全部の章で依用した梵文校訂テクストは前回と同様に Hahn (2007) と Hahn (2011) と Straube (2019) である。また第二四話と第二六話はそれぞれ Hahn (2012) と Hahn (2005) の論文で個別に扱われて英訳も付けられているため、貴重なそれらの論文を注意深く読んだ。また Khoroche (2017) の英訳と Hahn & Lohöfer (2016) の独訳を絶えず参照した。ただし後者の独訳には第二二話の章が欠けている。

（2）他の詩人たちが凌駕することが出来ない偉大な詩人であるとして『師［アーリヤ］シューラ』に深い敬意を示すハリバッタが、その師の高みに到達することを意識して彼自身の創作を開始したらしいことを、ハリバッタの作品冒頭の序詩の第二・第三詩節の文から伺い知ることが出来る。

（3）ルル鹿ジャータカ（Ruru-jātaka, Pāli Jātaka 482）のパラレル文献として、中村元が『ジャータカ全集六』（春秋社）二九八頁の No. 482 Ruru-jātaka「関連資料」の記述で次の文献を挙げている：（1）大正 No. 152『六度集経』巻六 T3 33（＝（五八）修凡鹿王本生）；（2）大正 No. 153『菩薩本縁経』巻下 T3 66-68;（3）大正 No. 181『九色鹿経』T3 452-453;（4）大正 No. 187『方広大荘厳経』巻五 T3 566;（5）大正 No. 1450『根本有部毘奈耶破僧事』巻十五 T24 175-176;（6）Ruru-jātaka, Pāli Jātaka 482;（7）Rohantamiga-jātaka, Pāli Jātaka 501;（8）Āryaśūra's Jātakamālā 26;（9）Cariyāpiṭaka 16. ― なおアーリヤシューラのほか、サンガセーナ（僧伽斯那）も彼の『菩薩本縁経』（'Bodhisattvāvadānamālā）鹿品第七でその「ルル鹿ジャータカ」の話を扱っていることも、ハリバッタがその話を故意に避けた理由かも知れない。ただしハリバッタがサンガセーナのそのジャータカマーラーを読んでいたかどうか、確証は無い。

（4）それら三種の鹿ジャータカは分類する時に紛らわしいので、混乱しないように、「鹿（身代わり）」、「鹿（忘恩）」、「鹿（川渡し）」と、仮の名を付けて区別すべきであろう。ハリバッタ第一一話が「鹿（身代わり）」、アーリヤシューラ第二六話が「鹿（忘恩）」、ハリバッタ第二二話が「鹿（川渡し）」である。

（5）ハリバッタ第二二話 Mṛga-jātaka の第一パートの鹿ジャータカのパラレル文献として、次のものがある：（1）大正 No. 152『六度集経』巻六 T3 32-33（＝（五七）鹿王本生）；（2）Avadānaśataka No. 40;（3）大正 No. 200『撰集百縁経』巻四 T4 220-221（＝（三七）仏垂般涅槃度五百力士縁）；（4）大正 No. 1451『根本有部毘奈耶雑事』T 24, 397b10-397c13（＝蔵訳：北京版 44/229, 3, 8, cf. Panglung (1981), S.

201)；(5) Bodhisattvāvadānakalpalatā 80 Subhadrāvadāna; (6) Khotanese Jātakastava, tale No. 5 (= Dresden (1955), p. 425, vv. 27-29); (7) E. Waldschmidt (1950-1951): *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil III, S. 476-479 (Sondertext V-II Legende vom aufopferungsvollen Hirschkönig);

(8) 大正 No. 2087『大唐西域記』巻六、拘尸那揭羅国（クシナガラ国）、鹿が蹇兎を最後に渡河させた場所 T51 903c11-904a9. ― なお Avadānaśataka No. 40 の後半部分（鹿の話と樹神の話）と Bodhisattvāvadānakalpalatā, 80 Subhadrāvadāna の梵文和訳と説明は岡野（二〇二二）、二五七～三〇六頁にある。

(6) ハリバッタ第二二話 Mṛga-jātaka の第二パートの樹神誓願話のパラレル文献として、次のものがある：(1) Avadānaśataka No.40; (2) 大正 No. 200『撰集百縁経』巻四 T4 221（＝（三七）仏垂般涅槃度五百力士縁）；(3) 大正 No. 1451『根本有部毘奈耶雑事』T 24, 398a26-b28; (4) Bodhisattvāvadānakalpalatā, 80 Subhadrāvadāna; (5) E. Waldschmidt (1950-1951): *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil III, S. 483-488 (Sondertext V-IV. Legende von der hilfsbereiten Baumgottheit).

(7) ハリバッタ第二四話『ムーリカ・ジャータカ』(Mūlika-jātaka) のパラレル文献としては、Hahn (2012) の論文が指摘するように、次の二つがある：(1) Avadānaśataka, 90 Rāṣṭrapāla の最後のパート (J.S. Speyer (1909), Avadānaśataka, II, p. 125, ll. 5-13); (2) Bodhisattvāvadānakalpalatā, 103 Priyapiṇḍāvadāna, 21-22.

(8) ハリバッタ第二六話『ジャージュヴァリン・ジャータカ』(Jājvali-jātaka) のパラレル文献は、Hahn (2005) が指摘するように、大叙事詩 Mahābhārata 12.253.12-51 (Jājali の話) があり、また仏典では『大智度論』巻四 T25 89 と巻十七 T25 188 に「尚闍梨仙人」の記事がある。また Hahn が指摘していない該当話として、『僧伽羅刹所集経』巻上 T4 121a24-b9 の話がある。

(9) 干潟龍祥（一九八一）、一〇一頁、注六二。またその「少なくとも六回」ある壁画の場所として、同書七一頁、注四〇に、(1) Qyzyl, Schwertt.-h., (2) 小峡の第三窟, (3) Bodh.-gew.-h., (4) Māyā-h., (5) Schlucht-h., (6) Schwertt.-h. の、六箇所を記す。A. de Le Coq & E. Waldschmidt (1928): *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, Teil 6, S. 47-48, Fig. 132-137.

(10) ハリバッタ第三二話『ライオン・ジャータカ』(Siṃha-jātaka) のパラレル文献として、以下の五つがある：(1) 大正 No. 1509 大智度論巻三十三 T25 307c17-26; (2) 大正 No. 397-5 大方等大集経、曇無讖訳、海慧菩薩品第五 T13 70a23-b19; (3) 大正 No. 400 仏説海意菩薩所問浄印法門経、惟浄等訳 T13 515a23-b21; (4) 大正 No. 2121 経律異相、宝唱等集 T53 244b16-c9; (5) Khotanese Jātakastava, tale No. 32 (= Dresden, (1955), p. 436, vv. 106-108). これらのパラレルの情報については Lamotte (1944-1980), Tome V, pp. 2297-2298 の注を参照した。これらの文献のうち、(4) の経律異相巻四十七の文は、(2) の曇無讖訳から文を取って少し書き直したものであろう。また、(2) と (3) はどちらも梵文 Sāgaramati-paripṛcchā からの異なる漢訳である。それらの漢訳以外に、梵文からの蔵訳も存在す

る：'phags pa blo gros rgya mtshos zhus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo, 北京版 No. 819 (mdo sna tshogs, pu 1-124), デルゲ版 No. 152 (mdo sde, pha 1-115), ラサ版 No. 153 (mdo sde, na 1-180). この蔵訳と二つの漢訳をライオン・ジャータカの話の箇所で比べてみると、蔵訳のその話（ラサ版では 147b-148a）では、（2）の古い漢訳よりも（3）の新しい漢訳と文面がよく一致する。これら漢訳や蔵訳にみられる Sāgaramati-paripṛcchā のライオン・ジャータカの諸伝承は実質的には大差は無いと言ってよいが、その大乗経典の記事と、大智度論巻三十三にあるライオン・ジャータカの記事の伝承とを比べてみると、両者は話の展開が細部においてかなり違っている。大智度論巻三十三にある話では、ライオンは鋭い爪で自身の脇腹の肉を掴んで、その肉を鷲に与えることで、小猿たちを購う。他方、Sāgaramati-paripṛcchā の漢訳や蔵訳に見られる同話では、鷲から「もし自分の体を捨てることが出来るなら、小猿たちを解放してやろう」と言われたライオンは、即座に自分の体を捨てることに同意する。山の高みから投身せんとするそのライオンの態度に感銘を受けた鷲は、ライオンがその自殺を実行に移す前に、小猿たちを解放してやる。このようにライオンの捨身の行動に関して、大智度論の記事とは大きく違っている。ハリバッタの第三二話ライオン・ジャータカでは、ライオンは自分自身の体を鷲に食べさせようと自発的に申し出て、無防備に横たわって自身を鷲に提供しようとするが、その振舞いに鷲は感銘を受けて食べることはせず、ライオンの体を害することなく、彼に子猿たちを返す。その捨身の行動の点で、第三二話は大智度論よりも Sāgaramati-paripṛcchā の話の展開に近いといえる。なお、今昔物語集巻五にある本話も、大集経を元にしたものであろう。

（11）ただしチベットの伝承では作者の名前はハリバッタ（hari-bhaṭa）「ライオンのしもべ（侍者・傭兵・戦士）」（蔵訳 seng ge zhabs 'bring pa ライオンのしもべ）である。どちらの名にせよ、作者は自身の名から、ライオン（hari）という動物に特に親近感を感じていたであろうことは想像に難くない。

（12）干潟龍祥（一九八一）、一〇一頁、注六〇。彼はその「少なくとも七回も画かれている」ライオン・ジャータカの壁画の場所として、同書七二頁、注四五において、（1）Qyzyl, Musik.-h. L. 29;（2）Bodh.-gew.-h.;（3）Schlucht-h.;（4）小流峡第三窟；（5）Fussw.-h. β. 11;（6）Gebetm.-h. B 18;（7）Qumtura, XIX という七所を記す。つまり、Qyzyl に六つ、Qumtura に一つ、壁画がある。

（13）ウイグル語訳＝梵語の両語併記写本断片 (a bilingual Uighur-Sanskrit manuscript, MZ 652) における第三二話の文については Maue (1996) pp. 87-102 を参照のこと。ハリバッタ第三二話の 80c ～ 98a の箇所の文が記されており、九～一三世紀に書かれた写本らしい。― またスコイエン・コレクションのアフガニスタン出土梵文写本断片におけるハリバッタ第三二話の文の報告については Hahn (2002) を参照のこと。六～八世紀に書かれたものらしい。その梵文写本断片は二つあり、第一の断片には表に第三二話の 1+ の箇所の文、裏に 15 ～ 19+ の箇所の文、第二の断片には表に 41 ～ 45+ の箇所の文が記されている。アフガニスタンの梵文写本ではこの第三二話

以外の断片は見つかっていないようだ。

(14) 「本質的で堅固なもの（sāra）を獲得する」という表現については第六話一九詩節を見よ。

(15) この『禅定波羅蜜』が本話（二六章）のテーマとなる。

(16) 以下、第九～第一三詩節においてハリバッタは「四禅」（四段階の禅定）を、初期仏教の聖典に説かれる古典的な定義を踏まえて説明する。

(17) 二六話、第二〇～第二四詩節に繰り広げられる菩薩の冷徹な思考と、この第二五詩節で「それゆえ」（tasmāt）と言って示される、菩薩の憐れみ深い結論との間に、一つの論理の飛躍があることに注意。この飛躍こそが苦しむ生き物たちに対する菩薩の深い同情、やさしさを物語る。菩薩がもつ智慧と慈悲という両極のはたらきがここで表現されていると見ることが出来よう。

(18) 茂みの暗緑色の上に浮かび上がってあちこちに臙脂虫たちがつくる赤色のスポットが見える美しい光景を、詩人は空想的に、女神ウマーが足先や足裏に塗っている臙脂紅の色が茂みに付着したものと表現した。

(19) お調子者の猿らしく、やたらに獣王を誉め讃えた後に、「それゆえ」（tasmāt）と言って、彼の言葉が急にかなり厚かましい言い方に変わっている。「あなた様にお預けして……森に出かけましょう」（nikṣipya tvayi gacchāvo vanam āvām）とは、お伺いや懇願の表現ではない。既に決めた自分たちの予定を一方的に告げる表現である。そして三界のあらゆる生き物を守らんとする菩薩の崇高な使命感につけ込んで、獣王に子守をさせようというこの猿の夫妻の厚かましさに菩薩が少したじろいで困惑する態度が、この話の場面を一層ユーモラスなものにしている。

(20) Straube 版は蔵訳に従い、sthitvācakitam ではなく sthitvā cakitam と読むが、私は Hahn 版のように sthitvācakitam と読んだ。Straube 版のように読むと、前の詩節から語られている小猿たちの無邪気な行動と合わないように思う。

(21) ここで Straube 版の ujjhita-pramādaḥ の読み（写本ABに支持される）に従って、私は「放逸［の生き方］を捨てた者」と訳したが、Hahn 版の ujjhita-*apramādaḥ の読み（蔵訳に支持される）でも文の意味は通る。その場合は「不放逸 apramāda を捨てた者として地獄落ちにいたる様な……」と訳せるだろう。

(22) 「喜悦が生じます」と訳した原文について、私は Straube 版の読み gatir（前進、道）が正しいかどうか、確信がもてなかったので、Hahn 版のように *ratir（喜悦）と読んだ。蔵訳は dga' ba（喜悦）である。

(23) 本詩節（三二話七九）の pāda c において、Hahn は vihaṅga- と読み、Straube は vihaṅgam と読むテクストの違いがある。そのどちらの読みを採るかで、構文が変わり、詩節の後半の訳が大きく違ってしまう。私はここで Hahn の読み ― それは蔵訳によって支持さ

れる―に依って、「樹の枝の巣の上でうずくまっては跳ね動いている鳥たちの［ように］（ālīna-cañcad-vihaṅga-）跳ね動く（calita-）柔らかなたてがみの毛先をもつかのライオンは、自分の棲み処へと帰って行きました」と解釈した。ここでは鳥（vihaṅga-）の語が比喩として使われていると考えられる。ハリバッタの作る長い複合語を訳す時に、複合語の途中で「～のように」の訳語を補って訳さねばならない文は、作品中に多く見つかるので、その解釈の仕方に問題はないと思われる。他方、もし Straube の読みに依って解釈するならば、本詩節の後半は、「樹の枝の巣の上にとまって［そわそわと］跳ね動いている鳥たちの［いる］（ālīna-cañcad-vihaṅgam）自分の棲み処へ（nivāsam）、揺れ動く（calita-）柔らかなたてがみの毛先をもつかのライオンは帰って行きました」と訳せるであろう。鳥たちが巣の上で跳ね動くという表現を、夕暮れに鳥たちが帰巣して騒ぐ、夕暮れ時という時間の情景描写とみなす解釈はたしかに理解できるが、しかしそれがライオンの棲み処を表現する句になってしまう点に私は不満を感じる。ライオンの棲み処（nivāsa）は洞窟であるし、鳥たちの巣は森に偏在しているはずであるから、彼らの巣が特にライオンの棲み処だけにあるとすれば、変である。また蔵訳は明らかにこの Straube の読みを支持しない。それらの点を考慮して私はここで Hahn の読みに依って訳した。

参照文献（先の（一）～（三）の論文で既に参照論文として記した文献は省く）

Dresden, Mark J. (1955): "The Jātakastava or 'Praise of the Buddha's former Births'", *Transactions of the American Philosophical Society*, Vol. 45, No. 5, 397-508.

Hahn, Michael (2005): "Haribhaṭṭa and the Mahābhārata." *Journal of Buddhist Studies* (Centre for Buddhist Studies, Sri Lanka) 3, pp. 1-41.

―― **(2012):** "Mūlika, Seeker of Roots: Legend No. 24 from Haribhaṭṭa's Jātakamālā," in *Indologica: T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, Book 2, ed. L. Kulikov and M. Rusanov, pp. 279-306. (Orientalia et Classica 40). Moscow: Russian State University for the Humanities.

Lamotte, Étienne (1944-1980): *Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra)*, T. 1-5. Louvain.

岡野潔（二〇二一）：「Kalpalatā と Avadānamālā の研究（3）―Subhadra, Hetūttama, Pretikā の説話―」、『南アジア古典学』七号、二五七～三六五頁。

※本研究は JSPS 科研費 17K02217 の助成を受けたものである。